

県立農業試験場整備実験事業（婦中町小倉地区）に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(1)

富山県 婦中町

小倉中稻遺跡 発掘調査報告

1993年3月

婦中町教育委員会



序

婦中町は豊かなねい丘陵の縁、とうとうと流れる神通川、井田川と美しい自然環境の中で、長い歴史と伝統に培われ町であります。

町の山間地は呉羽丘陵と連なり、安田城跡、各願寺等を中心とする埋蔵文化財の宝庫と言われてゐるのであります。

今度、小倉地区の小倉中稲遺跡が県営ほ場整備に先立ち、平成4年より、この地の発掘調査を実施いたしましたところ、建物、石組遺構、池状遺構等の遺構が検出されました。

この遺跡は、鎌倉時代と室町時代、戦国時代の3時期を中心として鎌倉時代の初めから戦国時代までのおよそ400年間にわたって營まれた集落遺跡であることがわかり、中世の歴史を考える上での重要な資料であると思います。

本書はこうした調査の成果をまとめ、今後の調査研究を進める上で参考にするとともに埋蔵文化財の理解に役立てていただければ幸いと思います。

終わりに調査にご協力いただきました、地元の方々をはじめ関係各位に深く感謝を申し上げます。

平成5年3月

婦中町教育委員会
教育長 清水信義

例　言

- 1 本書は富山県婦負郡婦中町小倉地内に所在する小倉中稻遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は県営流動化特別促進は場整備実験事業(婦中町小倉地区)の実施に先立ち、富山県農地林務部富山農地林務事務所の依頼を受けて婦中町教育委員会が実施した。調査費用の地元農家負担金は婦中町教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。調査の実施にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査担当者の派遣を受けた。
- 3 調査事務局は婦中町教育委員会生涯学習課に置き文化係長見波重尋が調査事務を担当し課長清水隆吉が総括した。
- 4 調査期間・面積は次のとおりである。なお、本文では前期調査地区をA地区、後期調査地区をB地区とよぶ。

前期調査 平成4年5月11日～6月25日 調査面積 1,750m²

後期調査 平成4年10月1日～11月25日 調査面積 900m²

- 5 試掘調査・発掘調査担当者および調査員は次のとおりである。

試掘調査 平成3年度 調査担当者 富山埋蔵文化財センター文化財保護主事 島田修一

　　調査員 富山埋蔵文化財センター 主任 齊藤 隆

平成4年度 調査担当者 富山埋蔵文化財センター文化財保護主事 岡本淳一郎・伊佐智法

本調査 前期調査 調査担当者 富山埋蔵文化財センター文化財保護主事 高梨清志

　　調査員 富山埋蔵文化財センター 主任 久々忠義

富山埋蔵文化財センター文化財保護主事 安念幹倫

後期調査 調査担当者 富山埋蔵文化財センター 調査課長 狩野 陸

富山埋蔵文化財センター文化財保護主事 高梨清志

- 6 資料の整理、本書の編集と執筆は、富山県埋蔵文化財センターの職員の協力を得て、調査担当者がこれに当った。

- 7 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から有益な教示と助言を頂いた。記して深甚なる謝意を表したい。

安念幹倫・伊佐智法・宇野隆夫・越前慶祐・岡本淳一郎・久々忠義・齊藤 隆・酒井重洋・境 洋子・島田修一
橋本正春・宮田進一

- 8 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

(1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。

(2) 基準杭は調査区の西側を通る主要地方道八尾小杉線に沿って、任意に2点の基準点を設定した(X90・Y0～X110・Y0)。なお、基準杭のX軸は真北から9°54'西へ偏る。

(3) 遺構の表記は次の記号を用いた。

掘立柱建物：SB 溝：SD 穴・土坑：SK 柱穴：SP 井戸：SE

(4) 挿図の土器の縮尺は、陶器類（珠洲・越前・八尾）は1/4にし、その他は1/3に統一した。本製品の縮尺は原則として1/3とした。写真図版の遺物の縮尺は、原則として1/2・1/3とした。

- 9 出土品および記録資料は、富山県埋蔵文化財センターが保管している。

- 10 発掘調査・遺物整理参加者は次のとおりである。

安部正信・加藤数信・宮田昌喜・小川銀蔵・田中幸一・田中光子・生田キヨ・横江信子・館谷君子・生田寿美子
宮田よしえ・生田夏江・寺山三郎・小田真一・横江忠男・齊藤滋一・水無 修・加藤常信・横江君子・横江なみこ
本田ミコ・高橋みよし・内山澄子・舟田登美子・熊本笑子・山崎みふみ・高田ミドリ・野原善信・荒川吉松・江野
信義・渡辺正三・青野利隆・野尻幸男・吉野澄子（作業員）

生田寿美子・中坪千春（整理作業員）

本文目次

序文			
例言			
目次			
I 序章	1	IV B 地区	19
1 位置と環境	1	1 遺構	19
II 調査の経緯と経過	2	2 遺物	25
1 調査の経緯と試掘調査の概要	2	V まとめ	27
2 地形と本調査の経過	4	引用・参考文献	
III A 地区	5	写真図版	
1 遺構	5		
2 遺物	13		

挿図目次

第1図 地形と周辺の遺跡	第10図 出土遺物実測図
第2図 試掘調査位置と遺跡範囲	第11図 出土遺物実測図
第3図 地形と調査区割図	第12図 出土遺物実測図
第4図 小倉中稻遺跡A地区遺構配置図 及び遺構断面図	第13図 小倉中稻遺跡B地区遺構配置図 及び遺構断面図
第5図 SB01・02、石組遺構	第14図 SB01・SK01・SD16・SK65・SE24
第6図 SE39・41・65・66・74・83・110	第15図 SB02・03、SE54
第7図 SK119	第16図 出土遺物実測図
第8図 SK113・103・44・101・11	第17図 出土遺物実測図
第9図 出土遺物実測図	

I 序 章

1. 位置と環境（第1図）

本書で報告する小倉中畠遺跡は富山県婦負郡婦中町小倉地内に所在している。

婦中町は富山県のはば中央部に位置する町で、町域は丘陵部と平野部に大別される。丘陵部は富山県を東と西に二分する呉羽丘陵から牛岳へと連なり、平野部は神通川と井田川によって形成された扇状地で、富山平野に続く。神通川は町域の東部に沿って北流する。井田川は平野部の中央を貫流し、支流の山田川は西南部の山谷を曲流し外輪野地区で河岸段丘を形成して平野部に出て羽根地区で井田川と合流する。小倉中畠遺跡は井田川左岸の平野部に位置し、12世紀後半～16世紀後半にわたって営まれた集落遺跡である。周辺には先土器時代から中世に至まで数多くの遺跡が存在している。主な遺跡としては細谷遺跡群（先土器・縄文時代）、牛滑遺跡（縄文時代中期～後期）、高日附遺跡（弥生時代）、勅使塚古墳・富崎千里古墳群千里寺群・小倉雜木水河原遺跡（古墳時代）などがある。中世に入る遺跡の西に位置する富崎山には富崎城・森山城跡・高山城跡など多くの城館が築かれる。このことから、当地区が富山平野から砺波平野・飛騨へ抜ける交通・戦略上の要所として、重要な位置を占めていたことがうかがえる。



第1図 地形と周辺の遺跡 1. 小倉中畠遺跡 2. 小倉中畠II遺跡 3. 小倉雜木水河原遺跡 4. 高日附遺跡 5. 勅使塚古墳 6. 千坊山遺跡
7. 蓬花寺遺跡 8. 宮崎城跡 9. 富崎野庭遺跡 10. 富崎南野遺跡 11. 下瀬離山道路 12. 富崎赤坂遺跡 13. 下瀬向山道路 14. 下瀬城跡
15. 富崎千里古墳群 16. 千里片堀遺跡 17. 森田山城跡 18. ゴダイ塚 19. 大熊城跡 20. 牛滑遺跡 21. 高山城跡

II 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯と試掘調査の概要 (第2図)

平成2年度、県営農地流動化特別促進は場整備実験事業（婦中町小倉地区）が策定された。これを受け、県教育委員会・婦中町教育委員会・富山農地林務事務所・地元土地改良区との間で協議を行い、同年12月に分布調査を実施し、遺物散布地を9地点で確認した。翌3年度に5箇所で試掘調査を行い、小倉中稻遺跡・小倉雜水河原遺跡を確認した。

今年度の調査は平成4年度の工事区域に係る4箇所（No.2・7・8・9）を対象として行った。調査は重機及び人力により試掘トレンチを掘り下げ、遺物包含層と遺構の有無の確認を目的とした。期間は、No.2地区を対象とした第1期調査が5月11日・12日、No.7・8・9地区を対象とした第2調査期間が10月14日～10月20日である。

これらの地区は、地形的にはいずれも井手川左岸の標高約31m～32mの扇状地上に位置する。

No.2地区 調査区の地形は西側を中心に微高地状を呈する。調査は約8,400m²の対象地に試掘トレンチを13本設けて、地山面（20～60cm）まで掘り下げた。調査の結果、遺構については黒褐色砂質ロームを覆土とする穴を5箇所確認した。遺物は中世土師器・珠洲が出土している。中世土師器は12世紀末～13世紀初めの小型（口径約8cm）で底部系切りをもつ、珠洲は壺・片口鉢の胴部片である。遺構・遺物から、微高地状の西側は小倉中稻遺跡の一部とする。

No.7地区 調査は約7,200m²の対象地に試掘トレンチ12本を設けて、地山面（10～60cm）まで掘り下げた。調査の結果、包含層・遺構・遺物は確認されなかった。

No.8地区 調査は約3,000m²の対象地に試掘トレンチ6本を設けて、地山面（20～60cm）まで掘り下げた。調査の結果、包含層・遺構・遺物は確認されなかった。

No.9地区 調査区の中央に約50cmの小谷状の段差があり、東側を中心に微高地になっている。調査は約2,200m²の対象地に試掘トレンチ4本を設けて、地山面（15～50cm）まで掘り下げた。調査の結果、遺構は穴・溝を検出した。遺物は中世土師器・珠洲が出土している。珠洲は片口鉢の体部から底部にかけての破片とこね鉢の口縁部、および壺の胴部片である。こね鉢は13世紀のものである。遺構・遺物等から、東側の微高地は小倉中稻遺跡の一部とする。

試掘調査のまとめ

調査の結果No.2・9地区で小倉中稻遺跡の広がりを確認できた。また、小倉中稻遺跡が南北に長く延びる微高地に位置する遺跡であることがわかった。この微高地の続く八尾町域まで遺跡が広がる可能性は高いものと考える。

(伊佐智法)

試掘調査結果

地区名	試掘年月	時代	遺跡名
No. 1	平成3年5月	古墳・中世	小倉雜水河原遺跡
No. 2	平成4年5月	中世	小倉中稻遺跡
No. 3	平成3年11月	中世	小倉中稻遺跡
No. 4	平成3年11月	——	——
No. 5	平成3年11月	中世	小倉中稻Ⅱ遺跡

地区名	試掘年月	時代	遺跡名
No. 6	平成3年11月	——	——
No. 7	平成4年10月	——	——
No. 8	平成4年10月	——	——
No. 9	平成4年10月	中世	小倉中稻遺跡



第2図 試掘調査位置と遺跡範囲 ($S = 1/3,000$)
小倉中畠遺跡、小倉中畠II遺跡、小倉雜水河原遺跡
(旧No2・No3・No9、No5、No1)

試掘トレチ

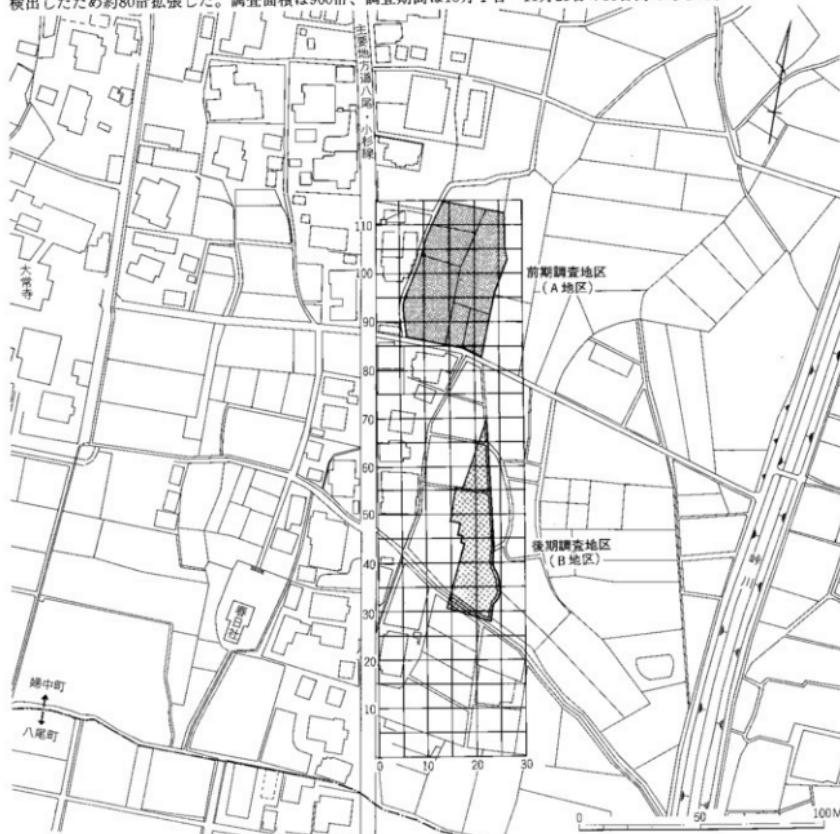
試掘調査位置

遺跡範囲

2. 地形と本調査の経過（第3図）

小倉中縄遺跡は山田川の支流の峠川の左岸に位置する。地山は標高約31mを測り、南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡は現在、宅地・水田・畑として利用されている。調査地区付近は、ほ場整備がおこなわれておらず、峠川の旧河道跡など旧地形が良く残っている。

調査はA地区とB地区の2箇所でおこなった。A地区は今年度施工予定の水田部分についておこなった。試掘調査の結果をもとにバックホウによる表土除去を行った。表土除去後遺跡が南へ延びるのを確認し、再度表土除去をおこなった。調査面積は1,750m²、調査期間は5月11日～6月25日の29日間であった。B地区は今年度施工予定の農道と、これに接する水田部分についておこなった。試掘調査の結果をもとにバックホウによる表土除去をおこない、その後人力による遺構確認をおこなった。調査区の中央部で西に延びる建物跡（SB01）と、これに付属する溝（SD16）を検出したため約80m²拡張した。調査面積は900m²、調査期間は10月1日～11月25日の38日間であった。



第3図 地形と調査区割図 (1/2,000)

III A 地区

1. 遺構 (第4~8図)

調査によって検出したおもな遺構は自然河川1条、掘立柱建物2棟、石組遺構1基、井戸7基、池状遺構1基、溝5条、土坑、柱穴である。

(1) 基本層位 (第4図)

基本層位は調査区の西壁でⅠ層：暗灰色土（耕作土）・Ⅱ層：赤黄色シルト（床土）・Ⅲ層：暗褐色シルト（遺構構築面）である。遺物包含層はない。調査区北部西側の田面は一段低くなり、遺構は削平されていた。

X110~X115・Y15付近で炭を含む紫褐色粘砂土がⅢ層へ潜り込むのを認め、X112・Y15~Y20にかけてサブトレンドを設定し下層確認をおこなった。その結果、幅約8mの埋没河川を確認した。断面観察によって河道が東へ移動した様子を確認したので、これを鰐川の旧河道と考える。このことから、調査区付近の地形は中世以前に鰐川によって形成されたと考える。

(2) 掘立柱建物 (第4・5図)

SB01 調査区の南西部にあり、身舎の桁行3間・梁行2間、北面廂の東西棟で、棟方向をS-77°-Eにとる。規模は桁行総長5.4m (1.8+1.8+1.8)、梁行総長3.0m (1.7+1.8)、廂部分1.5mである。建物の中央部にはSK31が柱穴に囲まれる様にあり、建物の付属施設の可能性がある。遺物はSP26から中世土器(1)、SP27から基石と思われる者かれた黒い石(2)、SP46から白磁(3)が出土した。SK31からは中世土器(4)が出土した。

SB02 調査区の中央部東側で検出した。桁行3間・梁行2間の東西棟である。東側にSK115を取りか込むように廂が付き、棟方向をS-78°-Eにとる。SK115は建物の付属施設の可能性がある。規模は桁行総長6.3m (2.3+2.0+2.0)、梁行総長は西側で4.3m (2.1+2.1)・東側で4.9m (2.5+2.4)と幅がある。廂部分は0.5mである。柱穴からの出土遺物はない。SK115から中世土器と輸入陶磁器の天目茶碗(5)が出土した。

(3) 石組遺構 (第4・5図)

石組遺構 (SK05・08)は調査区の南西部、SB01の南側で検出した。石組遺構は深さ40cm、直径3.1mの丸い掘り方 (SK08)をもち、掘り方の中央部に1辺2.1mの方形の石組 (SK05)を築成している。石組は1辺15~30cmの河原石を2段に構築し、内側に石の面をそろえる。石組内部には拳大の河原石が多数入っている。遺物はSK08から珠洲の壺(8)・片口鉢(10)、砥石(12)が出土した。SK05から中世土器(6)、八尾の壺(36)、珠洲の壺(11)・片口鉢(9)、青磁(7)が出土した。

(4) 井戸 (第4・6図)

井戸は全部で7基検出した。うち、石組井戸4基、素掘り井戸2基、曲物の井戸側をもつもの1基である。SE39・65・66・83の4基は集中して構築されている。石組井戸の積み石は河原石を使い、右回りで積む。上層は河原石で埋められていた。7基の井戸の平面プランは円形を呈する。石組・曲物井戸は湧水層である暗灰色疊層・赤褐色疊層に達する。素掘りのものは湧水面には達しておらず、溢め升の可能性もあるが、ここでは井戸として取り扱う。なお、井戸の部分名称は宇野氏の区分〔宇野1989〕を用いる。

SE74 検出時の規模は、長軸1.93mの梢円形の掘り方をもち、石組の内径0.9m・深さ1.72mを測る。端正な石組をもつ10段積みの石組井戸である。水溜めは確認できなかなかったが、最下層の積み石から少し掘込まれていることや最下層から曲物の破片が出土していることから、浅い曲物の水溜めをもっていたと思われる。遺物はうめ土から中世土器(13)、自然堆積層の上層から瀬戸美濃の天目茶碗(14・15)の完形品、漆器の椀・皿(16~22)、板材(26)が一括出土している。最下層から著状木製品(23~25)が出土した。

SE110 検出時の規模は、1.32mの円形の掘り方をもち、内径0.95m・深さ1.22mを測る。9段積みの石組井戸である。石組は下2段まで綺麗に積んでいるが上はかなり乱雑である。井戸のすぐ横には2つのピットがあり、覆い屋があった可能性がある。水溜めには直径40cm高さ40cmの曲物が使われている。うめ土の河原石の堆積から珠洲の壺(32)・片口鉢(33)、瀬戸の三足盤(31)が出土した。

SE39 検出時の規模は1.54mの円形の掘り方をもち、内径0.82m・深さ1.22mを測る。石組は10段積みであり、石の積み方はかなり乱雑である。水溜めはもたない。うめ土から中世土師器(27・28)、珠洲の片口鉢(30)、青磁(29)が出土した。

SE65 検出時の規模は長軸1.93mの楕円形の掘り方をもち、石組井戸中最大である。内径0.80m・深さ1.44mを測る10段積みの石組井戸である。井戸は上部をSK37に破壊される。遺構構築面からの深さは1.8mを測り、最も深い井戸である。水溜めには直径約40cm高さ30cmの曲物が使われる。遺物は出土しなかった。

SE83 SE39とSK37の間に位置し、両方の遺構に切られる。曲物の井戸側をもち、直径40cm深さ1.46mを測る。覆土は上から茶褐色礫層(うめ土)、灰色粘質土・暗黒褐色粘質土・褐色砂質土(自然堆層)の4層に分かれる。自然堆積の上層から八尾の壺(36)、最下層から箸状木製品(37~54)18点、曲物の底板(56)、加工木(55)が出土した。36は石組遺構(SK05)から出土したものと接合した。

SE66 SE65の西に接して検出した。素掘り井戸で断面は半円形を呈す。直径1.68m深さ0.74mを測る。覆土は2層に分かれ上層は茶褐色砂礫層、下層は暗茶褐色砂礫層である。上層から珠洲の片口鉢(34)が出土した。

SE41 素掘り井戸で直径1.66m深さ1.20mを測る。下層には黒褐色腐植土と灰色砂の自然堆積層が見られた。うめ土から中世土師器(35)が出土した。

(5)池状遺構 SK119 (第4・7図)

調査区の中央で検出した。中央に土壘状の盛り上がりをもち、くびれる。全体の平面プランは瓢箪の様な形をしており、南北に長い。規模は長軸で10.75m、短軸はA区で3.62m・B区で4.7mを測る。A区には小石が一面に敷き詰められている。B区は、二段に分けて掘られ、東側には二列の石列があり、水口と考える。遺物は珠洲の壺(68)・片口鉢(69・70・72)、瀬戸美濃の天目茶碗(74)がA区の石の隙間から出土している、うめ土から出土したものは中世土師器(64)、八尾の壺(66)、珠洲の壺(67)・片口鉢(71・73)、瓦質の仏花瓶(75)がある。SD112はA区の北から流れ出し、A区との境は土橋状にくびれる。また、遺物も接合しており、SD112は開通施設と考える。このほか、72がSD07の出土品と接合しており、この溝がB区の水口に続く可能性がある。この他、図示しなかったが遺物が接合した遺構はSD06・SE39・65・74・110がある。

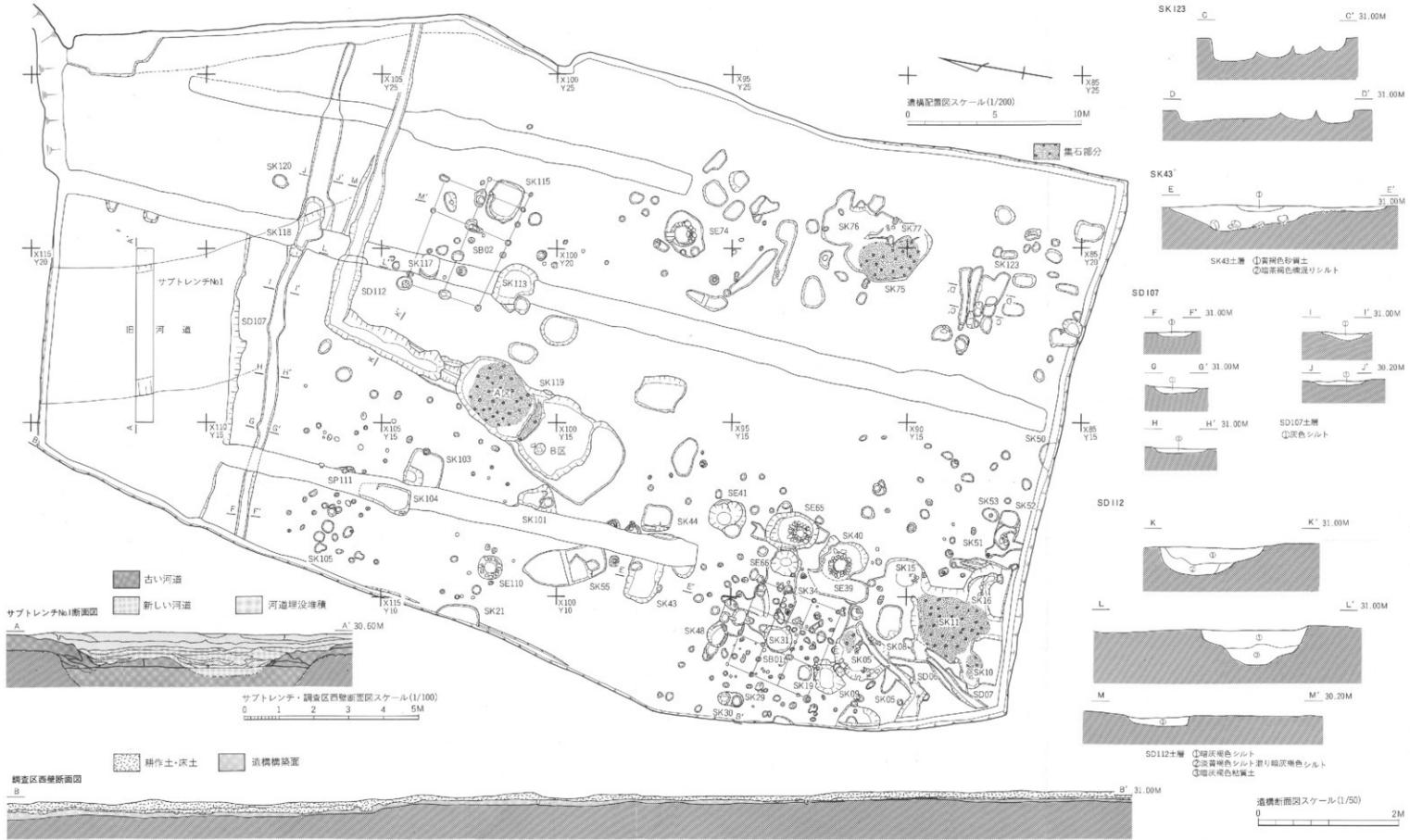
(6)溝 (第4・8図)

SD06・07 調査区の南西端で検出し北東へ延びる。ともに幅約50cm・深さ15cmを測り、SK11を切る。遺物はSD06から、珠洲の片口鉢(82)が出土し、SD07から中世土師器(83)、珠洲の壺(85)・壺(86)・片口鉢(84)が出土した。

SD107・112 調査区の北で検出した。SD107は東西に流れ、幅約0.8m深さ10cmを測る。SD112はSK119から出て、8m北へのび、屈曲してSD107と平行して東へ流れる。幅約1.3m深さは西で40cm・東で20cmを測る。ともに底でのレベル差はあまりないが、地形からみて西から東へと流れると考える。遺物はSD107から中世土師器(102)、珠洲の片口鉢(103)が出土し、SD112から中世土師器(57~59)、珠洲の片口鉢(60・61)、青磁(62)、瓦質火鉢(63)が出土した。

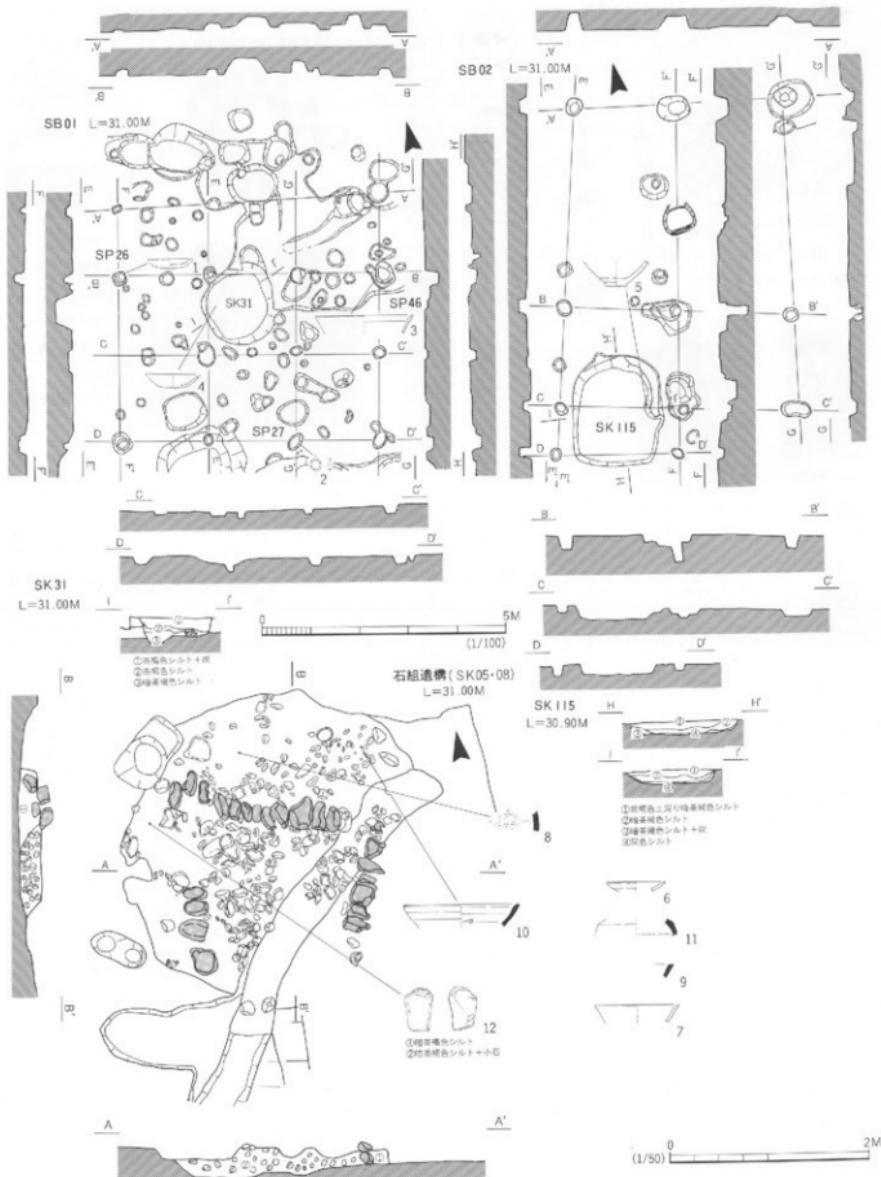
(7)土坑 (第4・8図)

単独で存在し1m以上の規模をもつ比較的大きな土坑は隅丸方形を呈し、調査区中央部から南に分布する。深さは20~30cmと浅い。遺物を出土した土坑は少ない。

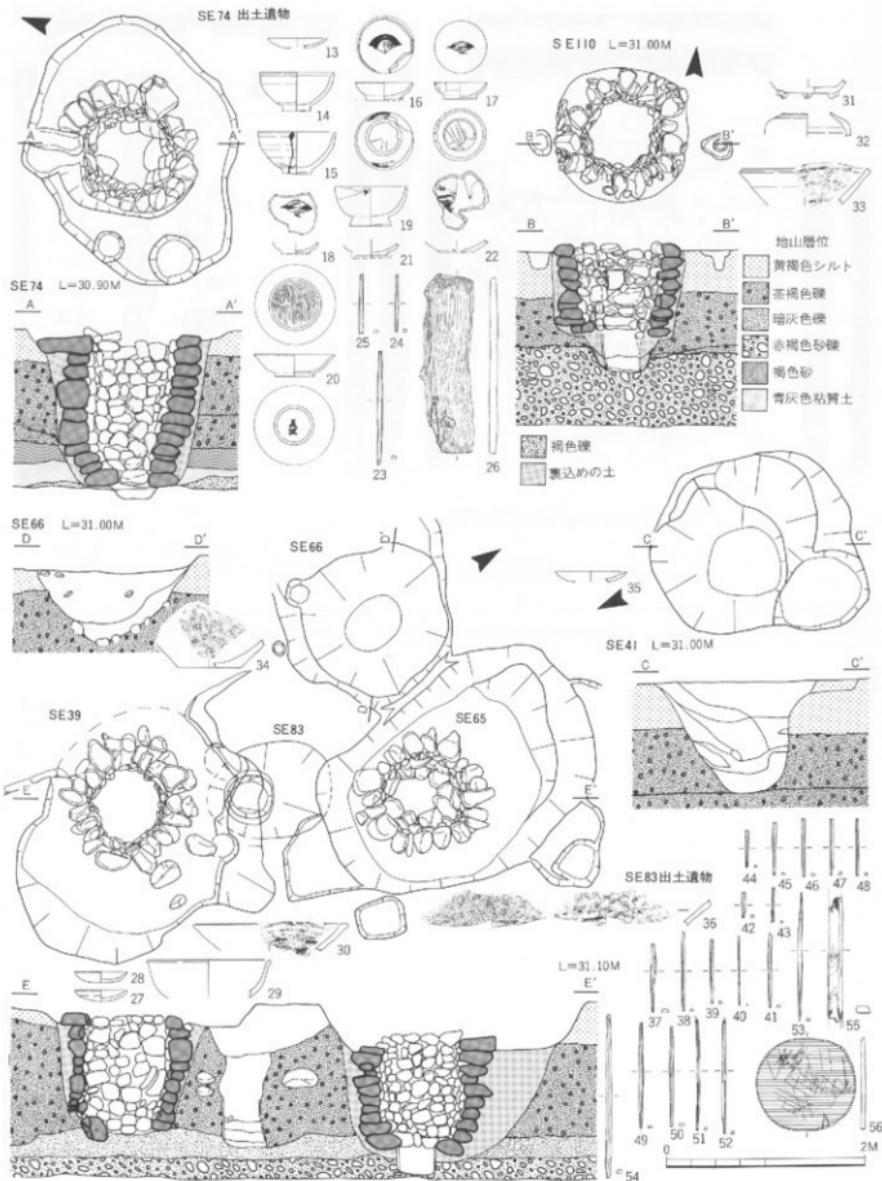


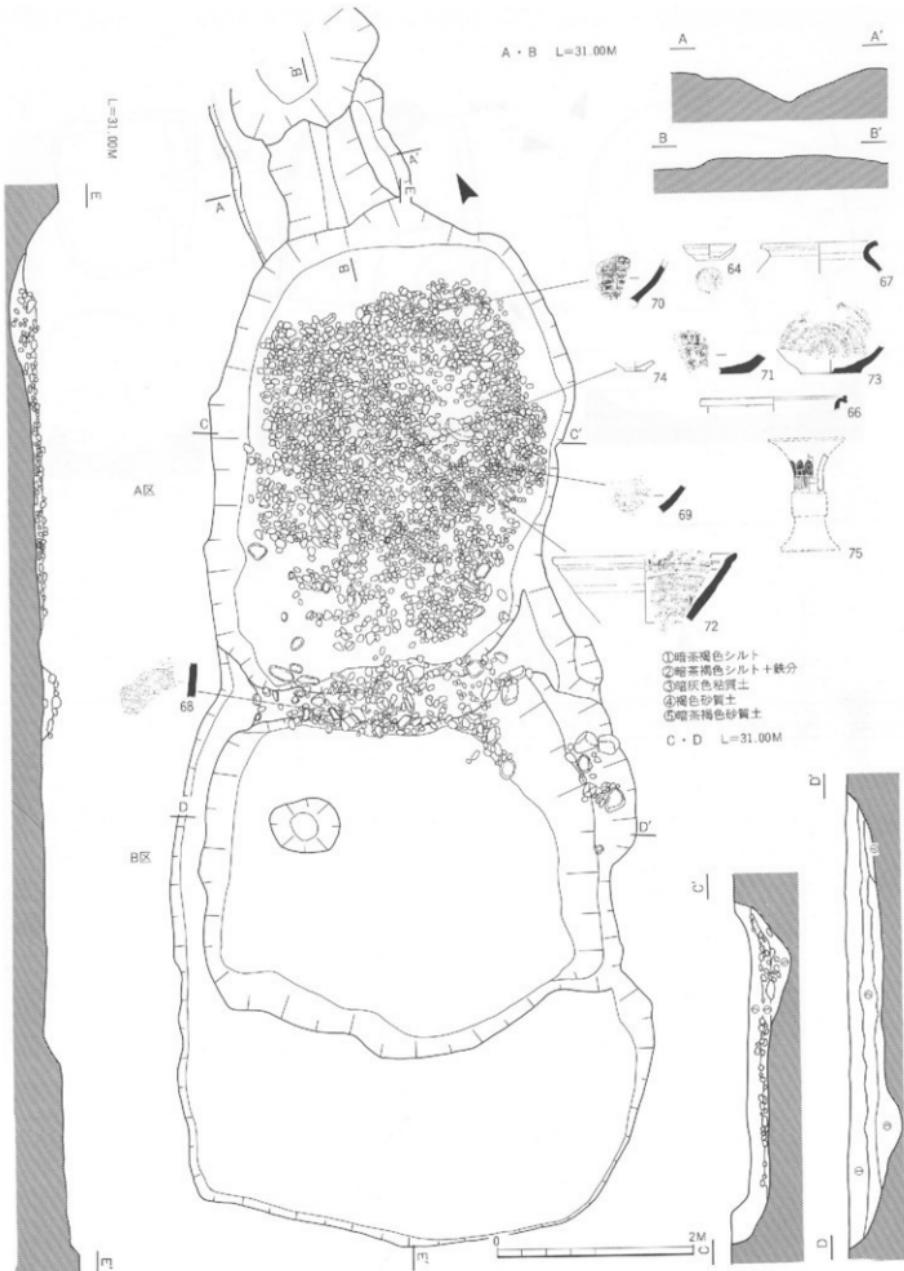
第4図 小倉中稻遺跡A地区遺構配置図及び遺構断面図

*遺構配図(1/200)、サブレンチ・調査区西壁断面図(1/100)、遺構断面図(1/50)

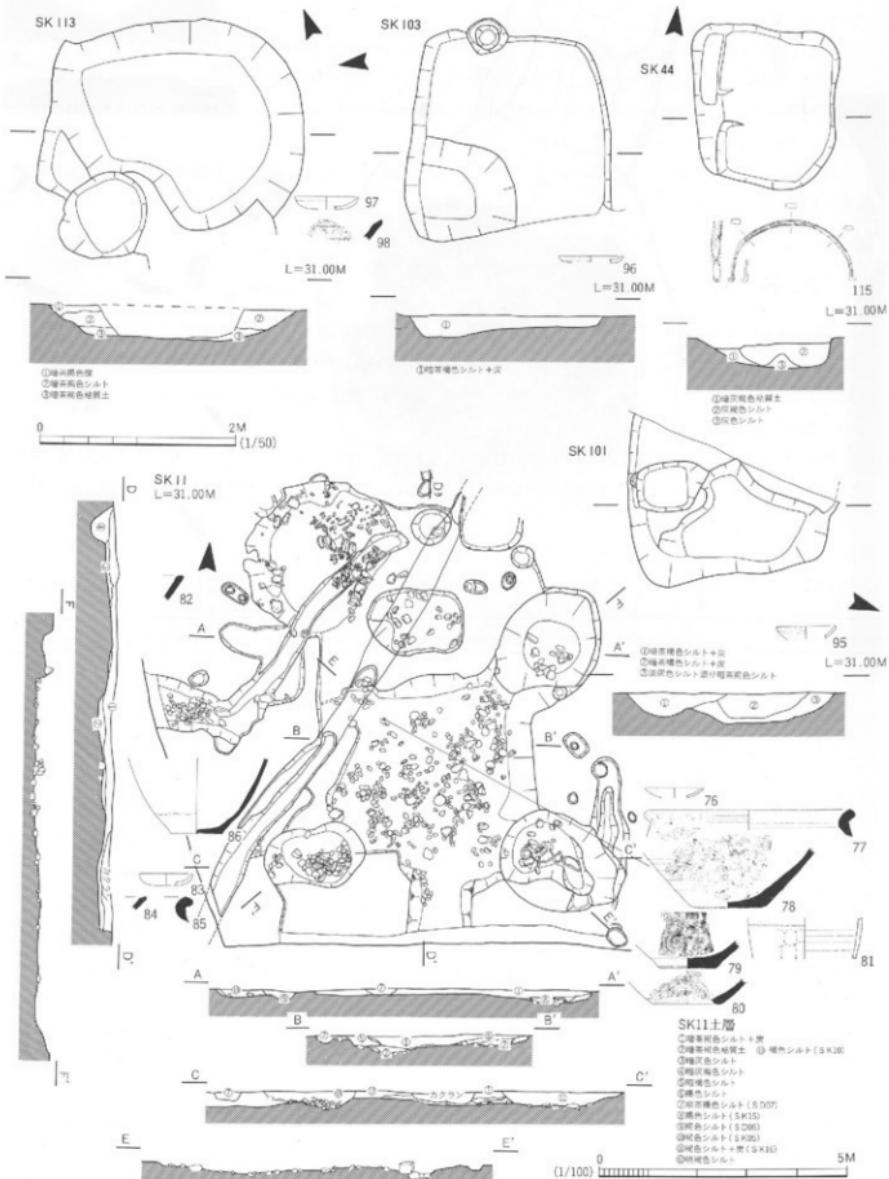


第5図 SB01-02(1/100)、石組遺構(1/50)





第7図 SK119(1/50)



第8図 SK113・103・44・101(1/50)、SK11(1/100)

SK44 SK119の南で検出した。1辺約1.6m、深さ26cmを測り、最下層から銅製の把手（115）が出土した。

SK11 調査区の南西端に位置する。1辺約4m深さ20cmを測り、3つの角はそれぞれSK10・15・16と接し、SD07に切られている。覆土には拳大の河原石が多量に入っていた。遺物は中世土師器（76）、珠洲の壺（77）・片口鉢（78～80）、瀬戸の瓶子（81）が出土した。

調査区の南東部で検出した土坑（SK75～77・123）は近世末に属する。遺物は伊万里、唐津の椀・皿に混じって骨壺、火葬骨などが出土している。当地区では以前ここに墓地あるいは火葬場があったと伝えられており、その跡と考える。

2. 遺 物（第9～12・17図）

今回の調査で出土した遺物は中世土師器、珠洲・八尾、瀬戸美濃、瓦賀仏花瓶、輸入陶磁器、石製品（滑石製鍋・石硯）、木製品（箸状木製品・漆器）、金属製品（銅製把手・銅鏡・鉄釘）があり、時期は中世の後半に集中している。記述は遺構ごとにおこなう。なお、中世土師器に関しては、これまでの研究成果〔中世土器研1992〕にしたがった。

（1） 硫立柱建物

SB01 1（SP26）は中世土師器で口径7cm、口縁端部（以下端部と略す。）に煤がつく。2（SP27）は直径1.8cmで全体が磨かれており、碁石と考える。3（SP46）は口禿の白磁の碗である。森田編年〔森田1983〕のⅩ類にあたり、13世紀後半から14世紀中葉である。

（2） 石組遺構

SK05 6は中世土師器で口径9cm、非ロクロである。端部はやや外反する。時期は16世紀後半である。11は珠洲の壺の肩である。7は青磁の碗で、端部は外反し丸く納まる。火を受けており、釉が変色している。

SK08 8は珠洲の壺の破片。9・10は珠洲の片口鉢で、吉岡編年〔吉岡1983〕V期（以下、珠洲の編年に関しては何期と記す。）にあたる。12は砥石である。

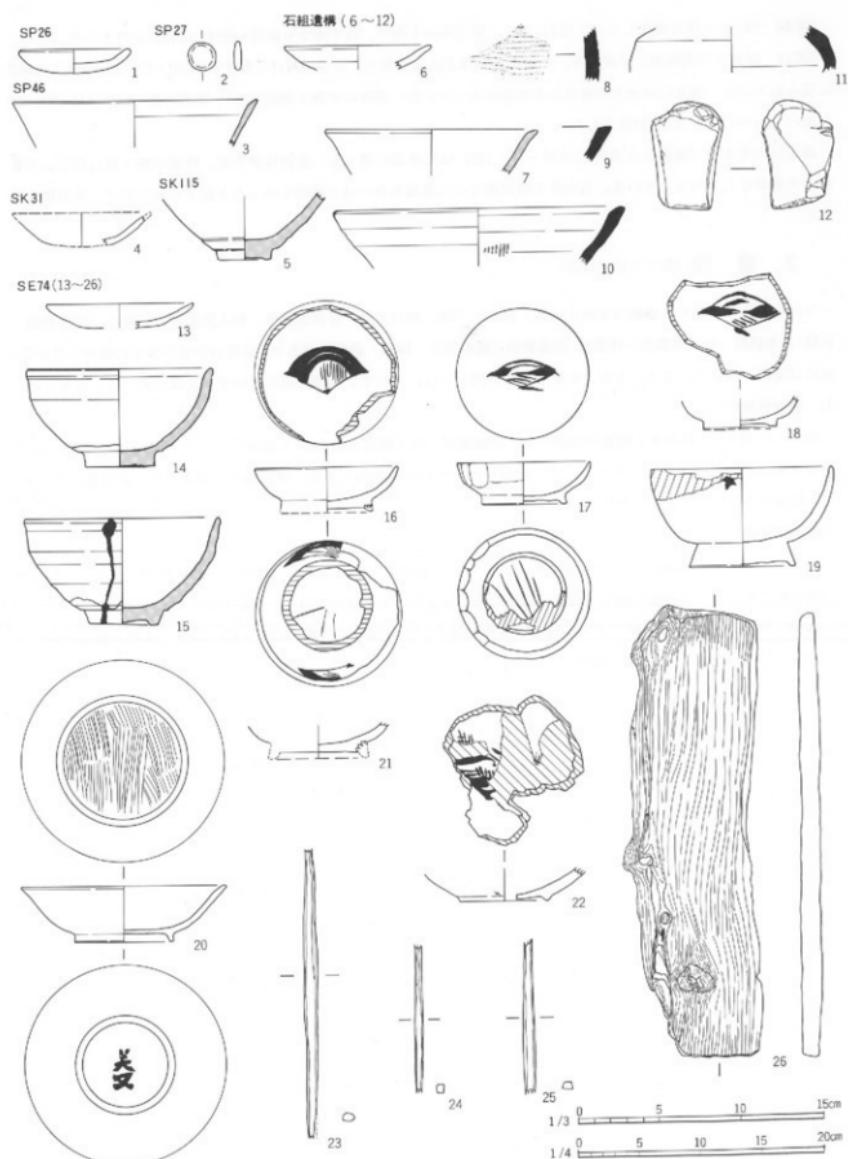
（3） 井 戸

SE74 14・15は瀬戸美濃製の天目茶碗で、ともに完形で出土した。14は口径11.4cm、黒褐色の鉄釉がかかる。15は口径12.0cm、暗緑色の釉がかかる。割れ面を漆で接合している。時期は14・15とも大窯の1期で16世紀前半である。16～22は漆器で、時期は久々編年〔久々1986〕のⅡb期で16世紀中葉にあたる。16～18は漆器の黒色皿で口径は8～9cmを測る。16は内面に赤色で開扇文が1点、体部外面に開扇文が2点描かれている。高台裏には3本の傷が付けられる。17は内面に赤色で開扇文が描かれる。体部外面には荒削りの跡が残る。また、高台裏には5本の傷が付けられている。18は内面に赤色で17と同様の開扇文が描かれる。器形は17と同じである。21・22は底部の破片である。21は内外面とも赤色で、高台裏は黒色で塗られる。22は内面に赤色で文様が描かれている。体部と高台の境に「×」の傷がある。20は口径12.4cmを測る黒色皿である。他の漆器と違い塗りが厚く非常に堅牢な作りである。内面は塗りの刷毛跡が残り、赤色が一部付着している。高台裏には文字が描かれる。19は杯である。口径11.0cmを測り、内面全面が赤色で、外面には赤色で文様が描かれている。26は板材で、漆器とともに出土した。13・23～25は最下層から出土した。13は中世土師器で非ロクロ、口径9cmを測る。時期は16世紀初めである。23～25は箸状木製品である。図示できなかったが、うめ土から珠洲の片口鉢片4点、壺片1点、最下層から曲物の破片が出土した。

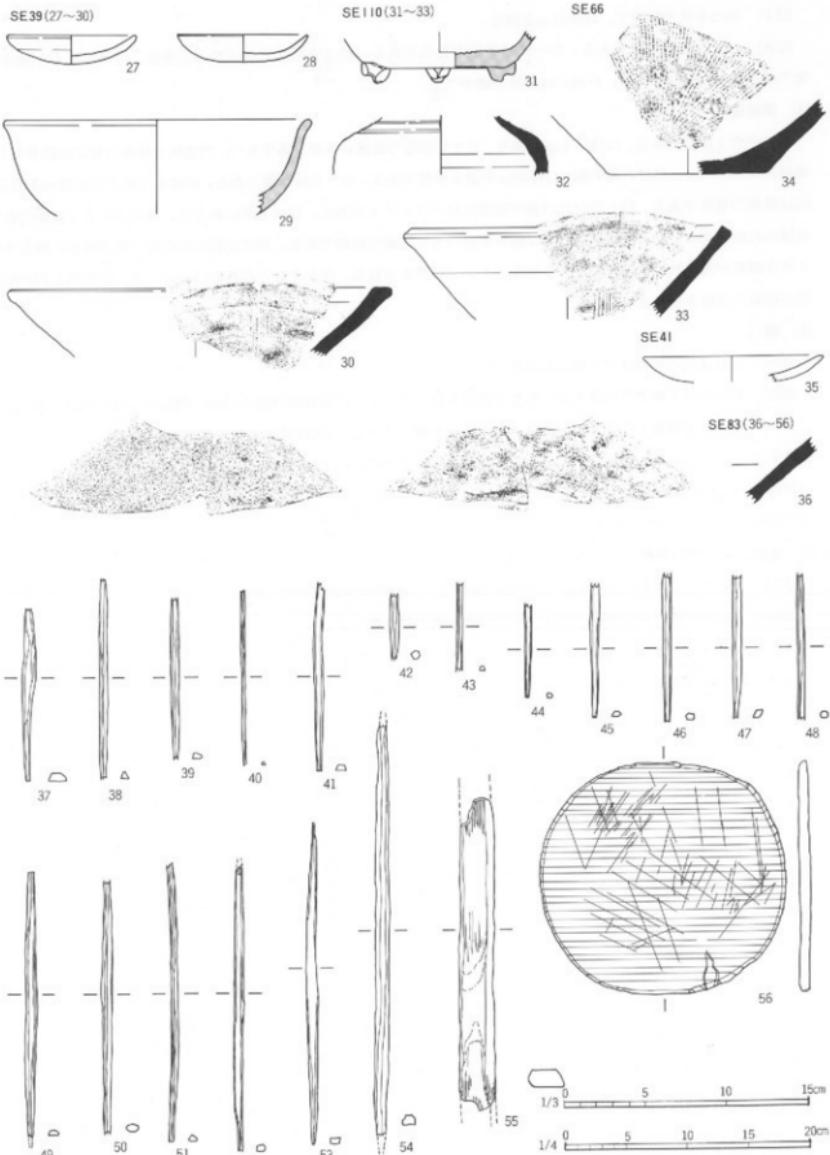
SE39 27・28は中世土師器でともに口径8cm、27は端部にナデをほどこす。時期は15世紀末～16世紀初めである。29は青磁の碗で、口径20cmを測る。30は珠洲の片口鉢で、V期にあたる。

SE110 31は瀬戸の三足盤で内面に沈線で三重の円を施す。32・33は珠洲の壺と片口鉢である。33はⅢ期にあたる。

SE66 34は珠洲の片口鉢である。焼きはあまり。



第9図 出土遺物実測図(1/3.7·8·9·11·26は1/4)



第10図 出土遺物実測図 (1/3, 30・32・33・34・36・55・56は1/4)

SE41 35は中世土師器で、口径11cmを測る。

SE83 36は八尾の壺片である。37~54は著状木製品である。53は完形品で長さ20cmを測る。55は加工木、56は曲物の底板で直径20cmを測る。片面には刃物の跡がつく。

(4) 池状遺構 (SK119)

64は中世土師器である。口径は8cmを測り、ロクロ成形で底部に糸切り痕をもつ。内底面と体部の境には段をもち、端部には煤がつく。66は八尾の壺、口径30cmを測る中型である。66~73は珠洲である。67は壺T種で口径24cmを測る、68は珠洲の壺片である。69~73は片口鉢で時期にはバラエティがある。72はⅥ期にあたり、焼きはあまく端部内面には擦れた跡がある。65は美濃の皿、74は瀬戸美濃の天目茶碗の底部である。75は瓦質の仏花瓶で体部外面に縱方向ミニガキ調整が施され、三角文と雷文の加飾スタンプが押捺される。復元すると器高約17cmになる。同様のものが福井県の朝倉氏遺跡から出土している。

(5) 溝

SD06 82は珠洲の片口鉢でⅦ期にあたり。

SD07 83は中世土師器で口径8cm、外型で端部を軽くナデる。85は珠洲の壺の口縁。86は壺T種の体部である。

SD107 は中世土師器で口径8cm、非ロクロで端部を軽くナデる。103は珠洲の片口鉢である。

SD112 57~59は中世土師器である。外型で端部を軽くナデる。口径は57が7cm・58が8cm・59が13cmを測る。60・61は珠洲の片口鉢である。ともにⅧ期である。62は青磁の底部である。高台裏には煤がつく。63は瓦質の火鉢で菊花文の加飾スタンプが押捺される。

(6) 土坑、その他の遺構

SK31 4は中世土師器口径8.5cm、内外面に煤がつく。時期は16世紀初めである

SK115 5は中国製の天目茶碗である。胎土は密で釉が厚くかかる。

SK11 76は中世土師器で口径9cmを測る。77は珠洲の壺の口縁、口径40cmを測る。78~80は珠洲の片口鉢である。78は焼きがあまく胎土も荒い。おろし目はすり減っていない。81は瀬戸の灰釉瓶子の胴部である。

SK37 88~90は中世土師器である。88は口径7.6cm、89は口径12cmとともに非ロクロで端部を軽くナデる。90は口径12cmを測る。87・91・92は珠洲の片口鉢である。87はⅡ期、91はⅢ期、92はⅤ期にあたり。93は瀬戸の天目茶碗で口径15cmを測る。淡緑色の釉がかかり、内面に目跡が残る。

SK57 94は珠洲の片口鉢でⅦ期にあたり。

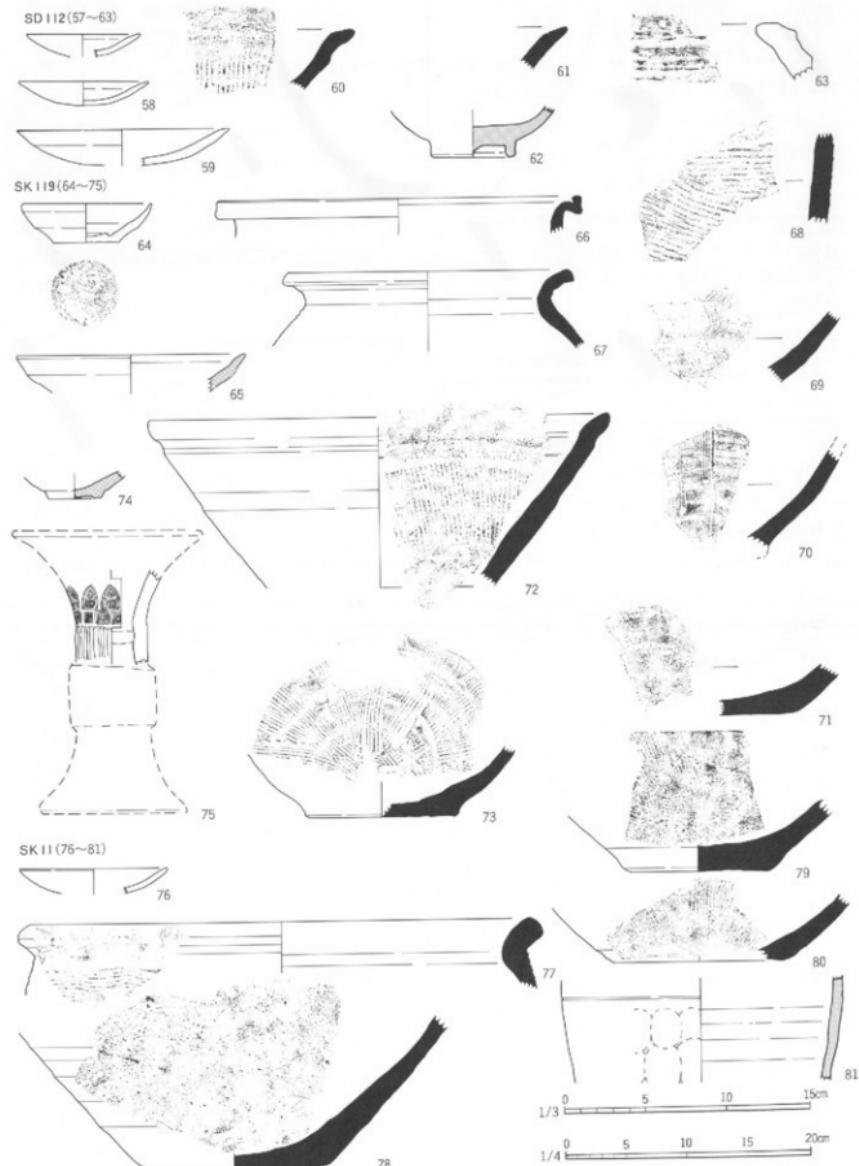
SK101 95は中世土師器で口径9cm、非ロクロで器高は深く、端部をナデ、面をとる。時期は13世紀中葉にあたり。

SK103 96は中世土師器で口径10cm、非ロクロで端部をナデる。時期は16世紀代にあたり。

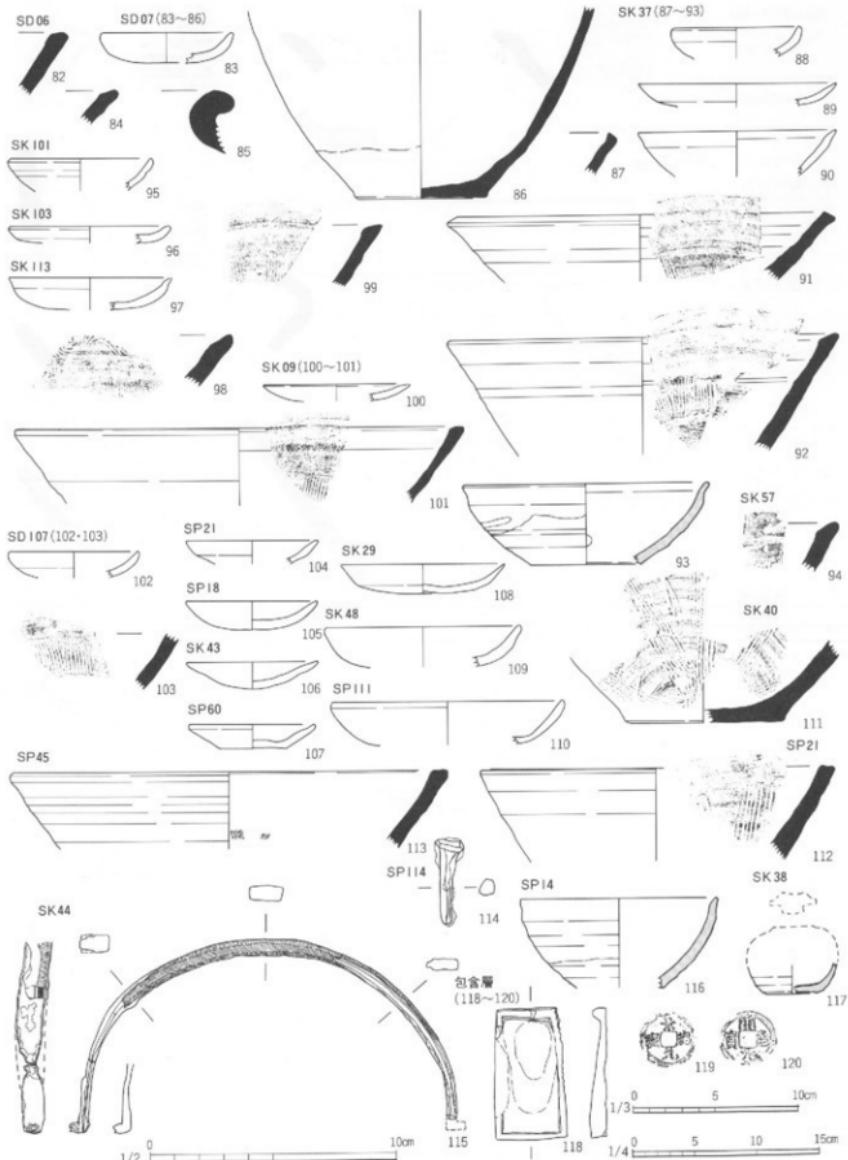
SK113 97は中世土師器で口径10cm、非ロクロで器高は深く、端部をナデる。時期は15世紀中葉にあたり。98は珠洲の片口鉢でⅦ期にあたり。

SK44 115は銅製の把手で仏具の水注・提子の把手と考える。全面に鍍金が施され外面に文様が描かれる。持ち手部分は植物繊維が捲かれる。

104 (SP21) · 105 (SP18) · 106 (SP43) · 107 (SP60) · 108 (SP29) · 109 (SP48) · 110 (SP111) は中世土師器で口径は8~14.2cmを測る。107はロクロ成形で底部に糸切り痕をもち、ほかは非ロクロである。111 (SK40) 112 (SP21) 113 (SP45) は珠洲の片口鉢である。ともにⅧ期にあたり。116 (SP14) は瀬戸美濃の天目茶碗で鉄軸がかかる。時期は15世紀中頃である。117 (SK38) は青白磁の小壺の底部である。丁寧なヘラ削り後内外面に施釉している。114 (SP114) は鉄釘である。118~121は包含層から出土した。118は石硯、119は景徳元宝、120は開元通宝である。121は滑石製の石鍋の破片である。この他、図示しなかったが、瀬戸の鉄軸印花文瓶子の胴部破片が出土している。



第11図 出土遺物実測図 (1/3, 60・61・63・66~73・77~80は1/4)



第12図 出土遺物実測図 (1/3, 115・119・120は1/2, 82・84~87・91・92・94・98・99は1/4)

IV B 地区

1. 遺構 (第13~15図)

調査によって検出したおもな遺構は、掘立柱建物3棟、井戸3基、溝5条、土坑、柱穴である。

(1) 基本層位 (第13図)

基本層位は調査区の西壁でⅠ層：暗灰色土（耕作土）・Ⅱ層：黄褐色シルト（床土）・Ⅲ層：淡灰褐色砂質土・Ⅳ層：淡褐色砂質土・V層：淡灰褐色砂質土・VI：白褐色砂質土層（地山）である。遺構はⅢ層上面から掘り込むものとV層上面から掘り込むものの二種類ある。Ⅲ・IV層はX55~60ラインで見られ、SB01の柱穴もⅢ層上面で検出するものとV層上面で検出するものの2種類あり、Ⅲ・IV層はSB01に関係する整地層としてとらえる。このため、Ⅲ・IV層とV層にはほとんど時期差はなく連続するものと考える。

(2) 掘立柱建物 (第13~15図)

SB01 この項では、SB01と付属遺構と考えるSD16・28・29、SE24、SK01を一括して述べる。

SB01は調査区の中央部で検出した。3間×4間の掘立柱建物で、溝(SD16)に四隅を囲まれ、南に木組井戸(SE24)と土坑(SK01)をもつ。長軸は、ほぼ東西方向(N-89°E)にとる。規模は、南北軸総長6.24mで、柱間は1.81~1.97mで、大方は1.90mを測る。東西軸総長は7.60mで、柱間は2.04~2.15mで、大方は2.08mを測る。各柱間の差はあまりなく、建物自体の歪みも少ない。正確に測量された建物といえる。ほぼすべての柱穴に柱痕が残り、柱穴の直径・深さともほぼ同一で差はみられない。柱穴の掘り方は円・楕円を呈し、直径約20cm、うめ土は褐色砂質土である。柱痕は、円形を呈し、直径約10~15cm深さ30cmを測る。覆土は暗灰色粘質土である。なお、SD41の上面から中世土器(13)が出土した。SB01はこのように柱間・柱穴の規模に差がなく、梁・桁方向の決定は困難であるが、他の遺構との関係から、桁行3間・梁行4間、もしくは身舎の桁行3間・梁行2間、東西二面廻の建物としてとらえたい。

SD16の平面プランは基本的には方形を呈し、SB01とSE24を囲んでいる。SB01の南に位置するSE24を囲むように、その部分が方形に突き出ている。溝の南北方向は建物の南北軸と一致する。規模は東辺14.15m・西辺12.20m・南辺19.95m・北辺11.0mを測る。幅約50cm、深さ10cmと浅い。覆土は暗灰色砂質土を基本とし、東西辺の北側のコーナーでは白褐色砂の堆積がみられた。遺物は、溝の東辺中央から中世土器(14)が出土した。溝の東西辺は北側に延びていて、地形的に北側が低いため排水の意味をもつと考える。なお、SB01とSD16の北辺には約60m²（東西10.4m×南北5.6m）の空間があるが、これは庭のような性格をもつ空間が考えられる。

SD28・29はV層上面から掘り込む。SD28は南北方向に流れ、SB01の北東コーナーで消える。規模は幅約30cm、深さ15cmを測る。SD29はSD16の東辺に沿って検出した。規模は幅約50cm、深さ15cmを測る。SD28はSB01の東辺に沿って延びており、SB01の雨落ち溝の可能性がある。SD29はSD16と同じ性格の溝と考える。ともにSD16と切りあい関係をもち、SD16が新しい。これは、初めにSD28・29があり、整地後改めてSD16が作られたことを意味する。なお、SD28・29から遺物の出土はなかった。

SE24はSB01の南で検出した。木組井戸で、掘り方は長軸2.2m・短軸1.6mの不整長方形を呈し、井戸側は一辺70~75cmを測る。深さは1.30mを測り、湧水層である赤褐色砂礫層に達している。井戸の四隅で一辺16cm、隅丸方形の隅柱の痕跡を認めた。うめ土は褐色砂であり、うめ土下層には水溜めに使用した曲物の痕跡が残る。また、最下層の自然堆積層では隅柱が残り、壁面に継板の痕跡が残っていた。遺物はうめ土上層から中世土器(10)、掘り方から珠洲の壺胴部破片(21)が出土している。また、井戸のうめ土上層でSK23を検出した。覆土から、焼けた珠洲の壺片と焼土・炭・骨片が出土した。SE24との関係は不明である。

SK01はSB01の南に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸3.7m・短軸2.8m、深さ10cmを測る。覆土には腐植土が

入る。覆土内から中世土師器 3 点（6～8）、珠洲の片口鉢(9)が出土している。8はSK50出土のものと接合した。当調査区での基本的な遺構覆土は砂質土系で、遺構内に腐植土が堆積する遺構はこの他にはなく、SK01はSB01のゴミ穴の可能性がある。

SB02 調査区の中央南で検出した。身舎の桁行 3 間・梁行 2 間、北面廂の東西棟である。棟方向は（N-12°-E）にとる。規模は、桁行総長5.20m、梁行総長3.45mを測る。柱間は桁行・梁行とともに1.73mを測る。廂部分は0.76mを測る。身舎の柱穴には柱痕が残り、柱穴の直径・深さともほぼ同一で差はみられない。柱穴の掘り方は円・楕円を呈し、直径約20cm、うめ土は褐色砂質土である。柱痕は、円・隅丸方形を呈し、直径約10～15cm深さ30cmを測る。覆土は暗灰色粘質土である。廂部分の柱穴は身舎の柱穴より小さく、掘り方は円・楕円を呈し、直径約10～30cm、深さ10cmを測る。なお、柱穴から遺物は出土しなかった。

SB03 調査区の南端で検出した。桁行 2 間・梁行 2 間、側柱の東西棟である。棟方向は（S-69°-E）にとる。規模は、桁行総長4.50m、梁行総長3.50mを測る。柱間は桁行1.8～2.4m、梁行1.56～1.86mと幅がある。建物自体も歪みがみられ、先の 2 棟の建物と比べ柱穴の配列が雑である。柱穴には柱痕が残る。柱穴の掘り方は円・楕円を呈し、直径約20cm、うめ土は褐色砂質土である。柱痕は、円形を呈し、直径約10～15cm深さ20～30cmを測る。覆土は暗灰色粘質土である。

(3) 井 戸（第13・15図）

SE54 SB02の東で検出した。素掘井戸で円形を呈す。規模は直径1.33m深さ1.10mを測る。湧水層の赤褐色砂礫層に達している。遺物は出土しなかった。

SE52 調査区中央で検出した。素掘井戸で隅丸方形を呈す。規模は一辺1m、深さ0.85mを測る。湧水層の赤褐色砂礫層に達している。SB01と切り合い関係をもち、SB01より古い。遺物は出土しなかった。

(4) 溝（第13図）

SD60 調査区南部で検出し、X40Y19～X47Y22にかけて弧を描くように走る。規模は幅50cm、深さ10cmを測る。流方向はSB03とはほぼ同じであり、区画溝と考える。

(5) 土坑・その他の遺構（第13図）

大きさにはバラエティがある。浅く、遺物を出土した土坑は少なく、性格を確認出来るものは少ない。この項では遺物を出土した土坑に関して記述をおこなう。

SK08・09 調査区の北端SK06・07とともに集中して検出した。ともに、不定形を呈し浅い。覆土は単層である。遺物は中世土師器（10・20）が出土している。

SK64 調査区中央、SD16の内側で検出した。円形を呈し、直径1.5m、深さ約50cmを測る。下層には石が投げ込まれていた。覆土から滑石製の鍋の破片（52）が出土している。

SK18 調査区中央に位置し、SD16と切り合い、SK18が新しい。楕円形を呈し、上部は擾乱で壊される。規模は長軸1.4m、深さ約40cmを測る。遺物は、珠洲の壺片（23）が出土している。

SK68 SB02の東にあり、円形を呈し、直径60cmの小さな土坑である。遺物は、中世土師器(5)が出土した。

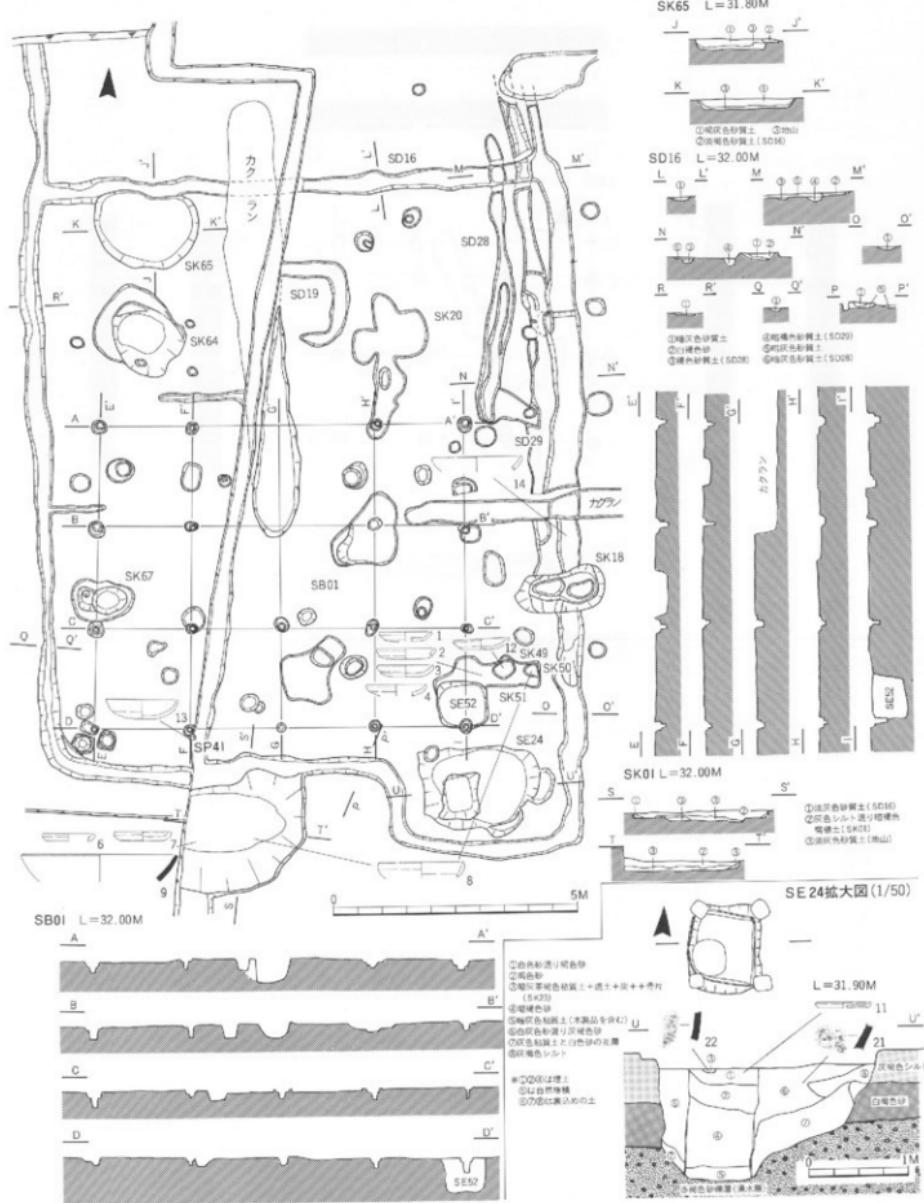
SK53 SB02の南に位置する。不定形を呈し、直径90cmの土坑である。覆土は褐色砂質土の単層である。遺物は上層から、中世土師器（15～17）が出土した。

SK49・51 SB01の東に位置する。ともに不定形を呈し、直径50cmの小さな土坑である。覆土は褐色砂質土の単層で、焼土・骨片が混じる。遺物は、SK49から中世土師器(12)が、SK51から中世土師器（1～4）が出土した。SB01と同時期にあたり、付属する可能性がある。

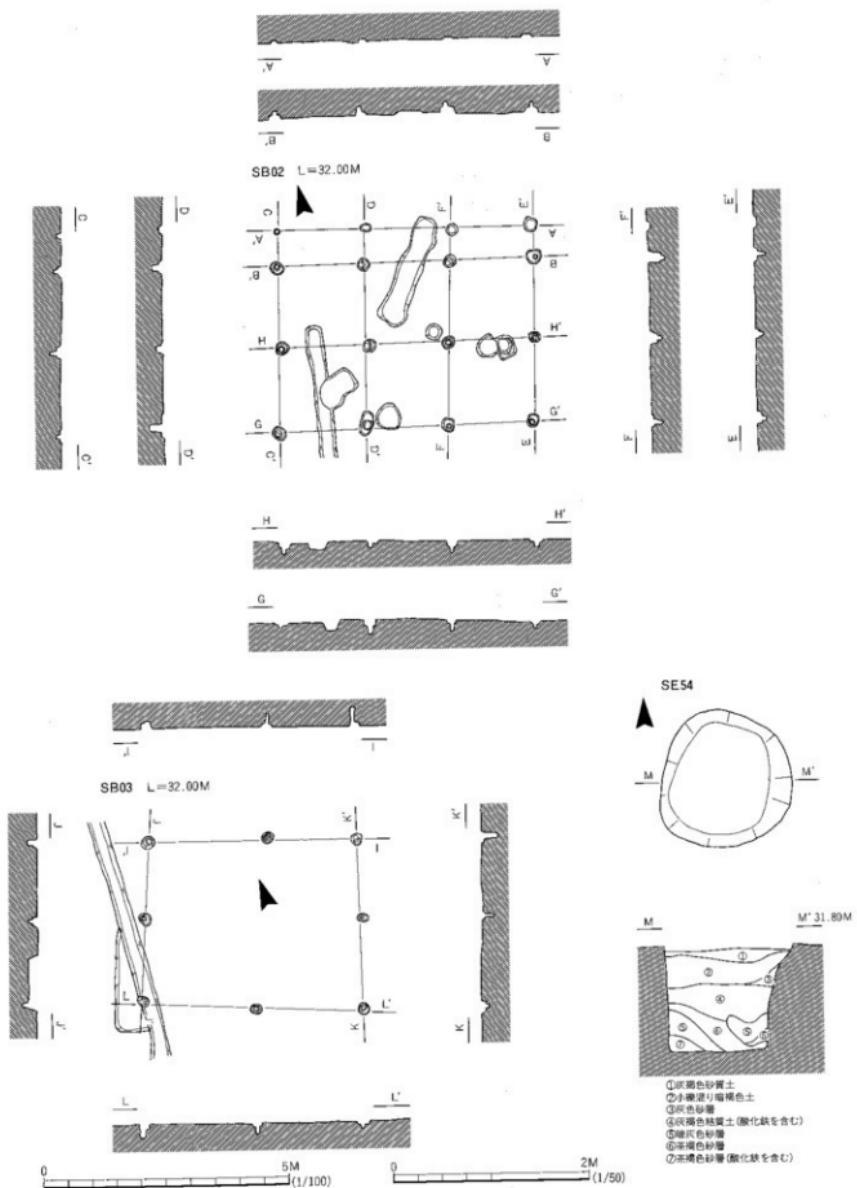
SK56 調査区の東南部にあり、楕円形で、長軸3.7mの土坑である。遺物は、中世土師器（18・19）が出土した。



第13図 小倉中橋遺跡B地区遺構配置図及び遺構断面図
※ 遺構配図(1/200)、M-M' セクションベルト(1/100)、遺構断面図(1/50)



第14図 SB01、SK01、SD16、SK65(1/100)、SE24(1/50)



第15図 SB02-03(1/100)、SE54(1/50)

2. 遺物 (第16・17図)

今回の調査で出土した遺物は中世土師器、珠洲、輸入陶磁器、石製品（滑石製鍋・石臼）、木製品、鉄滓がある。遺物量は整理箱に5箱と少ない。時期は中世前半が多く、特に遺物の大半を占める中世土師器は、12世紀後半～13世紀初めに集中している。記述は遺構ごとにおこなう。

(1) 据立柱建物

SB01 13は(SP41)中世土師器である。非ロクロの二段ナデで口径11cmを測る。内面には本口のハケの痕が残る。焼成は良好である。時期は12世紀後半～13世紀初めである。

(2) 井戸

SE24 11は中世土師器で、口径8.6cm、器高は1cmと低い。底部糸切りで、口縁部は短く屈曲している。内面には本口のハケ痕が残る。時期は12世紀後半～13世紀初めである。21は珠洲の壺胴部片である。外面は暗褐色で「+」のヘラ記号が見える。内面はナデを施し灰色で、焼成は良好である。なお、図示はしなかったが、井戸の最下層から井戸桶に使用した板材が出土している。

(3) 溝

SD16 14は中世土師器で口径14cmを測る。非ロクロで端部に面をとる。時期は12世紀後半～13世紀初めである。

(4) 土坑

SK01 6～8は中世土師器である。6は口径8cmを測る。底部糸切りで、口縁部は短く屈曲している。7は口径9cmを測る。底部糸切りで、口縁部は短く屈曲している。内面は指ナデが施される。8は非ロクロの二段ナデで口径13cmを測る。ともに時期は12世紀後半～13世紀初めである。9は珠洲の片口鉢であり、I期にあたる。口径32cmを測り、おろし目はない。

SK08・09 10はSK08出土、中世土師器で、口径9cmを測る。底部糸切りで、口縁部は短く屈曲しており、SE24出土の中世土師器に似る。内面には木口のハケ痕が残る。時期は12世紀後半～13世紀初めである。20はSK09出土、中世土師器の底部で、糸切り痕がある。時期は12世紀後半である。

SK18・23 22・23は珠洲の壺胴部片である。22は火を受けている。

SK51 1～4は中世土師器である。すべて非ロクロで端部にはナデを施す。口径は1が8cm、2が9cm、3が11cm、4が9cmを測る。時期は12世紀後半～13世紀初めである。

SK53 15～17は中世土師器である。15は非ロクロで口縁部に段をもち、端部にはナデを施す。口径11cmを測る。16・17は底部で糸切り痕がある。ともに時期は12世紀後半～13世紀初めである。

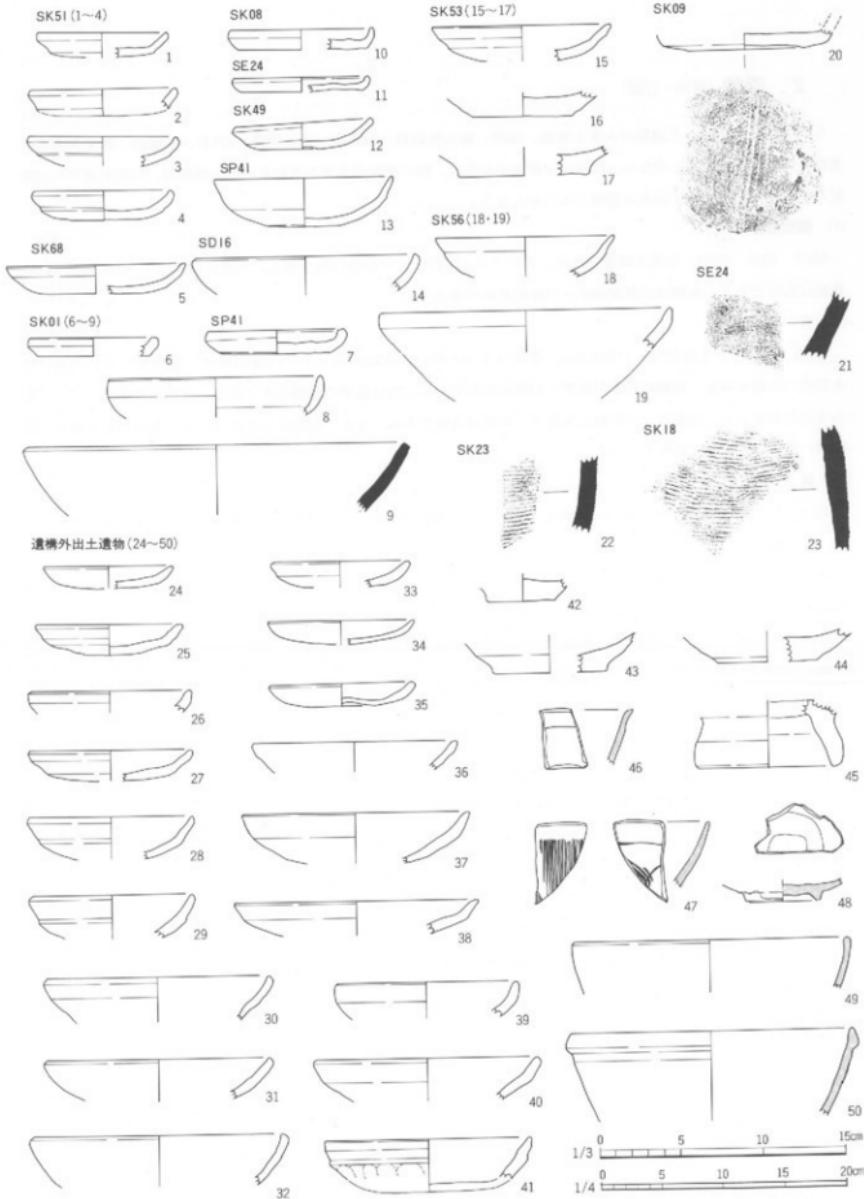
SK56 18・19は中世土師器である。18は非ロクロで口縁部に段をもち、外反する。端部にはナデを施す。口径11cmを測る。SK53出土の中世土師器に似る。19は底部糸切りの土師器碗の口縁部である。ともに時期は12世紀後半～13世紀初めである。

SK64 52は滑石製の石鍋の破片である。外面にはノミの跡が残る。

SK68 5は中世土師器である。非ロクロで二段ナデの口縁をもち、口径11cmを測る。

(5) 遺構外出土遺物

遺構外出土の遺物の分布はSE24・SK01付近とSB02付近に集中地點がみられる。25～45は中世土師器である。41までは非ロクロで、口径8～9cm、10～11cm、13～14cmの3タイプに分けられる。42～45はロクロ成形の碗である。46・47・49は青磁である。46は青磁A群碗I類-b、47は青磁B群碗にあたる。48は白磁の皿類-1で見込みを削る。50は玉縁の白磁碗である。51は滑石製の石鍋の破片である。図示しなかったが鉄滓はSK01のそばから出土している。



第16図 出土遺物実測図 (1/3, 21-22-23(±1/4)

V まとめ

今年度の調査で、小倉中稻遺跡はおもに12世紀後半～13世紀前半・14世紀前半・15世紀後半～16世紀前半の3時期を中心時期として、中世全般にわたり存続した遺跡であることがわかった。ここではA・B地区の代表的な遺構・遺物と器種構成について若干の考察を加えまとめたい。

(1) 遺構

石組遺構 検出時で石積を二段まで確認したが、遺構上層は後世の削平をかなり受けしており、三段積みの可能性もある。遺構の形成年代は切り合ひ関係から14世紀代と考える。石組は内側に石の面をそろえており、石組内に施設をもつと考える。今回の調査で確認した石組遺構は掘り方をもち構築方法は他の類似遺構とは違う。また、遺物も少なく性格決定には決め手を欠く。しかし、積極的に評価し、墳墓・経塚などの宗教施設を想定する。

井戸 A・B地区調査から、合計10基の井戸を確認した。ここでは宇野氏の研究成果〔宇野1989〕と比較し、検討をおこなう。石組井戸はA地区で4基確認した。二種類に分けられ、SE65は円筒形のCⅠ類、SE39・74・110は掘り方に裏込めをしないすり鉢形のCⅡ類である。木組井戸はA地区的SE83、B地区的SE24がある。SE83は曲物の井戸側をもつB種類、SE24は継板組隔柱横桟どめのBIV類である。素掘井戸のA類はA地区的SE41・66、B地区的SE52・54がある。時期は木組井戸のSE24は13世紀前半、SE83は14世紀代、石組井戸と素掘井戸が15世紀後半～16世紀前半に位置付けられる。これは宇野氏が指摘された、井戸Ⅲ期の木組井戸から石組井戸へ変化していった様相を示すと思われる。

SK119 A地区的中央で検出した瓢箪型の遺構である。中央のくびれ部分とSD112との境に土橋状の高まりをもつ。南側に水口をもちSD06・07が流れこむと考える。この他、遺物が接合した遺構はSE39・65・74・110があり同時期と考える。SD06・07からの水の流れをみると、一旦B区に溜まり、綺麗な上水だけがA区に入る。A区には石が敷いてあり水が濁らないようになっている。ある程度たまると境の土橋を越えSD112へ流れ出す。このような形態の遺構は現在類例がないが可能性としては、池・洗い場などが考えられる。

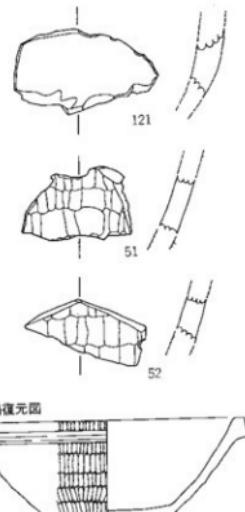
(2) 遺物

仏具 A地区から瓦質の仏花瓶と銅製の把手が出土している。瓦質の仏花瓶は富山県では少なく福光町出村I遺跡〔齊藤・荒井1993〕から出土している。銅製の把手は全面に鍍金が施され、外面には文様が付き、仏具の水注・提子の把手と考える。富山県では砺波市宮野森庵寺に提子の出土例がある。

石鏡 A・B地区から滑石製の石鏡の破片が出土している。富山県では出土例は少なく、福光町の梅原胡麻堂遺跡〔富山県文化振興財団1990〕に出土例が見られる。

土器・陶器器の組成 ここでは、最近の研究成果〔北陸中世土器研究会1988～1992〕を参考にして中世土器の法量と出土遺物の組成について述べ、あわせて遺跡の性格付けをおこなってみたい。なお、土器組成は個体識別破片数で数えた。ただし、珠洲の甕・壺に関しては同定が困難であり実際の個体数はかなり減ると思われる。

A地区的出土遺物の中心時期は15世紀後半～16世紀前半である。土器器の法量は7～9cm、10～13cmの2器種に分かれる。出土遺物のおもな器種は、土師器・珠洲・越前・八尾・瀬戸美濃・中国陶磁器があり、越中瀬戸は出土していない。土器器は48%、珠洲41%で全体の9割近くを占め、越前・瀬戸美濃の割合は3%と低い。土器器は実際には6割近くを占めると思われ、器種組成は庄川町櫛の城跡〔北陸土器研1991〕と似たような傾向がみられ、一般集落の器種構成に比べ土器器の占める割合が高い。仏花瓶の仏教関連遺物からみて当地



第17図 出土遺物実測図

区は宗教施設の可能性がある。

B 地区の出土遺物の中心時期は13世紀前半である。土師器の法量は 8 ~ 9 cm、10 ~ 11cm、13 ~ 16cm の 3 器種に分かれる。このうちクロロ土師器は小形品に集中する。出土遺物の最も器種組成は土師器が全体の74%を占め、珠洲18%、中国製陶磁器 7 %で、この時期の一般的な集落遺跡と比べ土師器・中国製陶磁器の割合が若干高い。

(3) 建物と遺構群の推移

最後に、建物と他の遺構との関連と、各調査区での遺構の推移を述べてまとめとする。

建物は A・B 地区で計 5 棟確認した。A 地区の SB01 は桁行 3 間、梁間 2 間、北面廻の建物で中央に SK31 が付属すると考える。時期は14世紀前半と考える。石組遺構が SB01 と近接し、軸方向もほぼ同一であり SB01 に付属すると考える。この他 SB01 と同時期の遺構は SE83・41 があり、調査区の南西部を占める。SB02 は桁行 3 間、梁間 2 間、東面廻の建物で SK15 が付属すると考える。時期は15世紀後半~16世紀前半と考える。SD112 が SB02 の周囲をめぐり、また、軸方向を同じくするため、SB02 と SK119、SD06・07・112、SE74・39・65 は同時期と考える。

つまり、A 地区は14世紀前半に SB01（石組遺構、SE83 が付属）を中心とする遺構群があり廃絶後、SB02（SK119・112、SD06・07、SE39・65・74・110 が付属）を中心とする遺構群が形成され、16世紀前半には廃絶し、近世末には墓域として使用されたと考える。

B 地区の SB01 は桁行 3 間、梁間 2 間、東西面廻の建物で SD16 が巡り、SE24・SK01 が付属する。時期は13世紀初めと考える。SB02・03 は同時期で SB02 が主屋、SB03 が小屋的な性格をもつと考える。遺物がなく時期は不明だが SB01 が廃絶したあとと考える。

参考文献 =

- | A 地区 檻跡・器種別発見件数 | | B 地区 檻跡・器種別発見件数 | |
|-----------------|--------|-----------------|-------------|
| 周辺 | 器種 | 周辺 | 器種 |
| 北側 | 土師器 | 177 (100 %) | 113 (100 %) |
| | 小計 | 177 [48.0%] | 113 [74.0%] |
| | | | |
| 東側 | 珠洲 | 65 (42.5%) | 22 (78.5%) |
| | 中国製陶磁器 | 19 (12.5%) | 7 (25.0%) |
| | 小計 | 184 [14.0%] | 29 [18.0%] |
| 南側 | 土師器 | 11 (8.8%) | 1 (100 %) |
| | すり鉢 | 1 (0.8%) | 1 (3.4%) |
| | 小計 | 12 [3.4%] | 2 [1.3%] |
| 八咫 | 土師器 | 4 (30.0%) | 4 (38.0%) |
| | 小計 | 4 [1.3%] | 11 [7.9%] |
| | | | |
| 廻戸通路 | 土師器 | 12 (100 %) | 153 (100 %) |
| | 小計 | 12 [3.4%] | 153 [100%] |
| | | | |
| 中国製陶磁器 | | 白磁器 | |
| 西側 | 青磁 | 3 (21.5%) | 4 (38.0%) |
| | 白磁 | 11 (78.5%) | 8 (64.0%) |
| | 小計 | 14 [49.0%] | 12 [7.9%] |
| 小計 | | | |
| | | | |
| | | | |
-
- | A 地区 用油漬骨群組成 | | B 地区 用油漬骨群組成 | |
|--------------|--------|--------------|-------------|
| 周辺 | 骨種 | 周辺 | 骨種 |
| 北側 | 土師器 | 177 (87.0%) | 113 (81.0%) |
| | 廻戸通路 | 12 (6.6%) | 11 (8.9%) |
| | 中国製陶磁器 | 14 (7.6%) | 13 (11.0%) |
| 東側 | 土師器 | 23 (54.5%) | 184 (81.0%) |
| | 珠洲 | 75 (58.5%) | 23 (40.0%) |
| | 八咫 | 12 (14.0%) | 1 (4.3%) |
| 南側 | 土師器 | 4 (4.5%) | 1 (4.3%) |
| | 廻戸通路 | 81 (28.0%) | 1 (3.8%) |
| | 小計 | 87 (100 %) | 55 (100 %) |
| 八咫 | 土師器 | 78 (89 %) | 5 (100 %) |
| | 廻戸通路 | 75 (21.0%) | 5 (9.1%) |
| | 小計 | 153 [100%] | 153 [100%] |
| 小計 | | | |
| | | | |
| | | | |



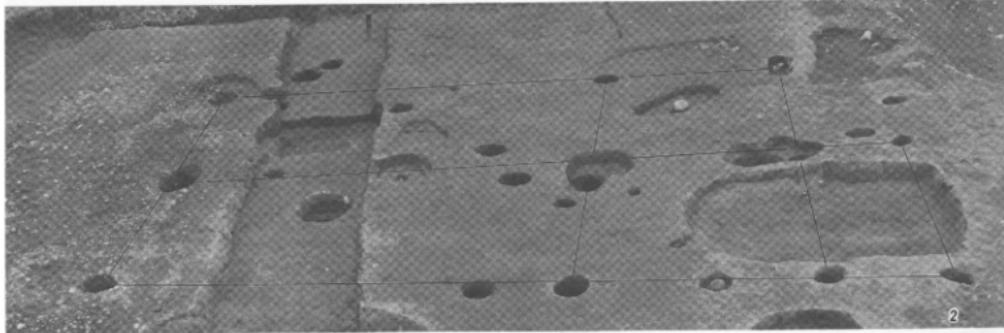
図版1 小倉中稻遺跡周辺航空写真



図版2 1. 前期調査区全景(北から) 2. 全景(東から) 3. 南西部ブロック(東から)



1



2



3



4

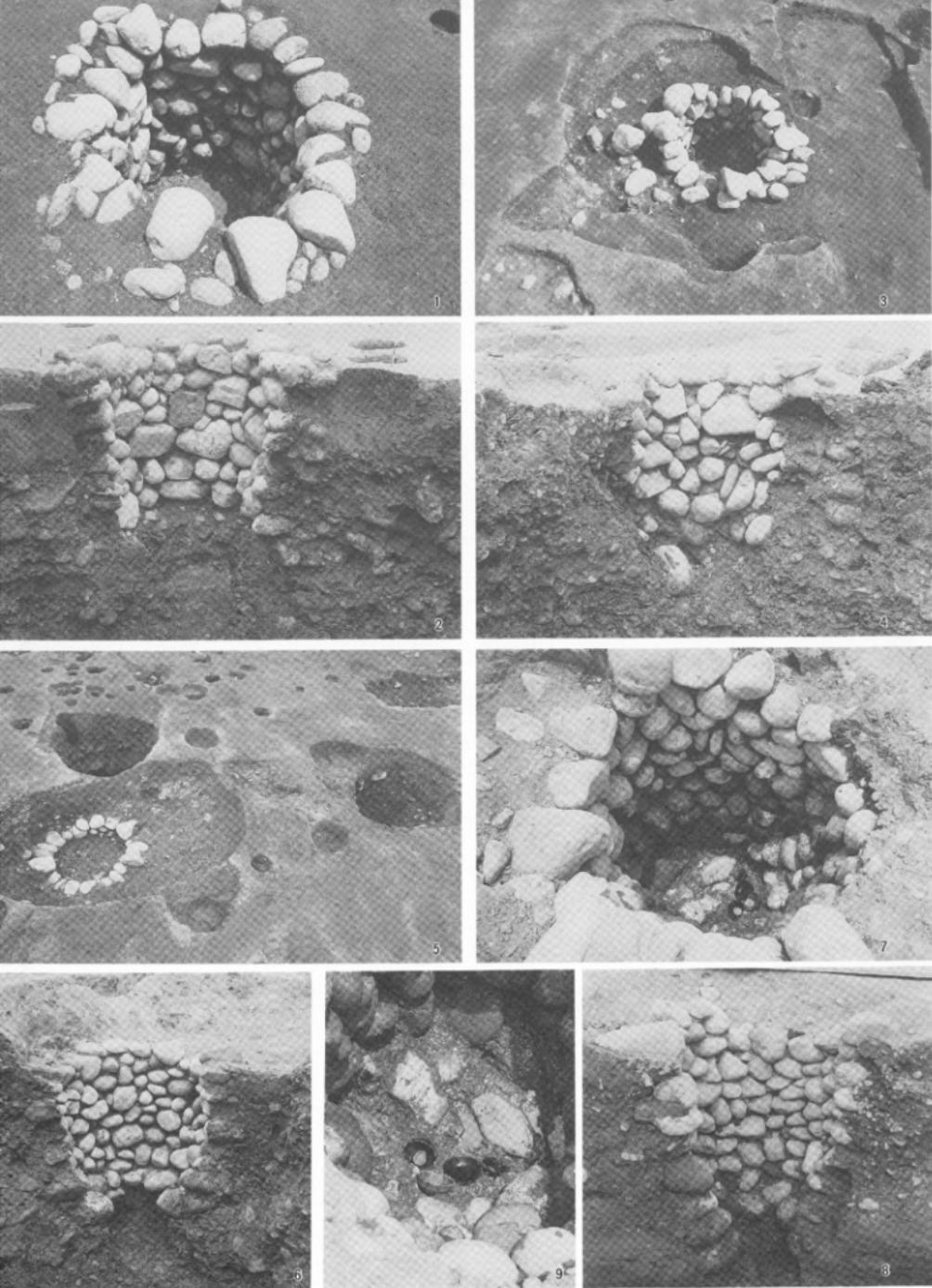


5

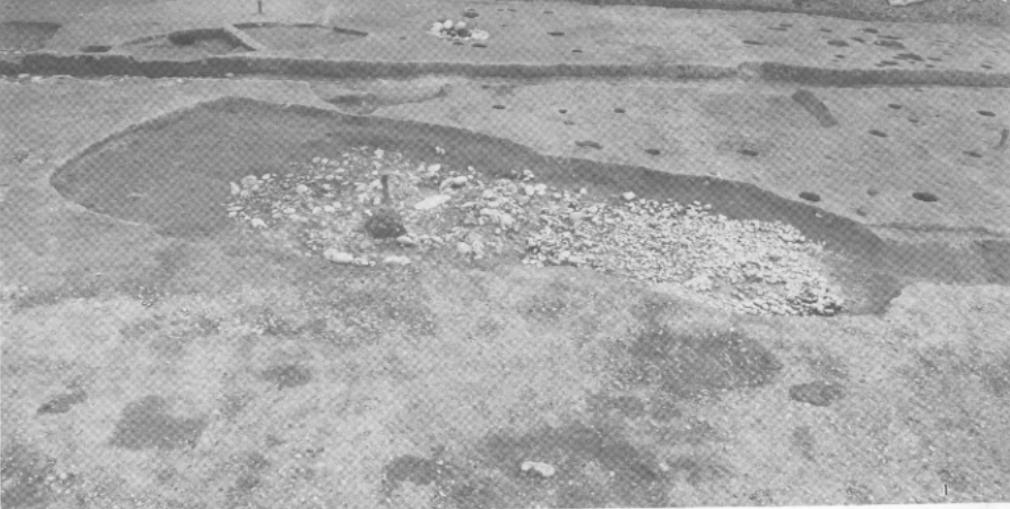


6

図版3 1. SB01(北から) 2. SB02(南から) 3. 石組造構(西から) 4. 石組造構(北から)
5. 石組造構断割り(東から) 6. 石組造構完掘(北から)



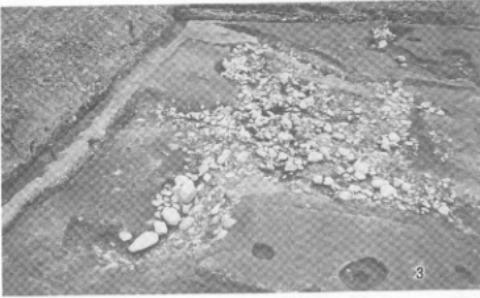
図版4 1. SE110 2. SE110断割り(南から) 3. SE39 4. SE39断割り(東から) 5. SE47・65・66(東から) 6. SE65断割り(東から)
7. SE74 8. SE74断割り(西から) 9. SE74遺物出土状況



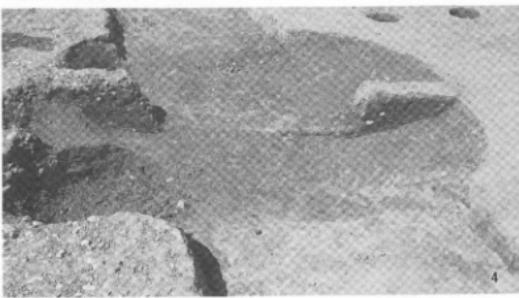
1



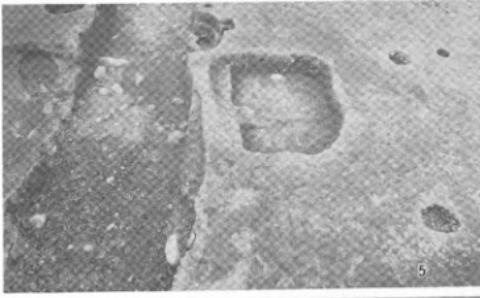
2



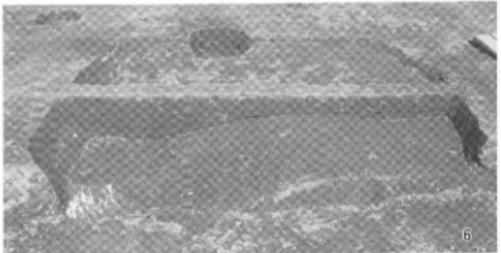
3



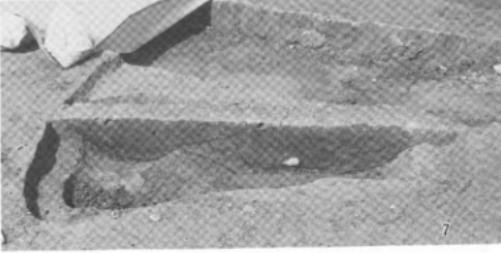
4



5

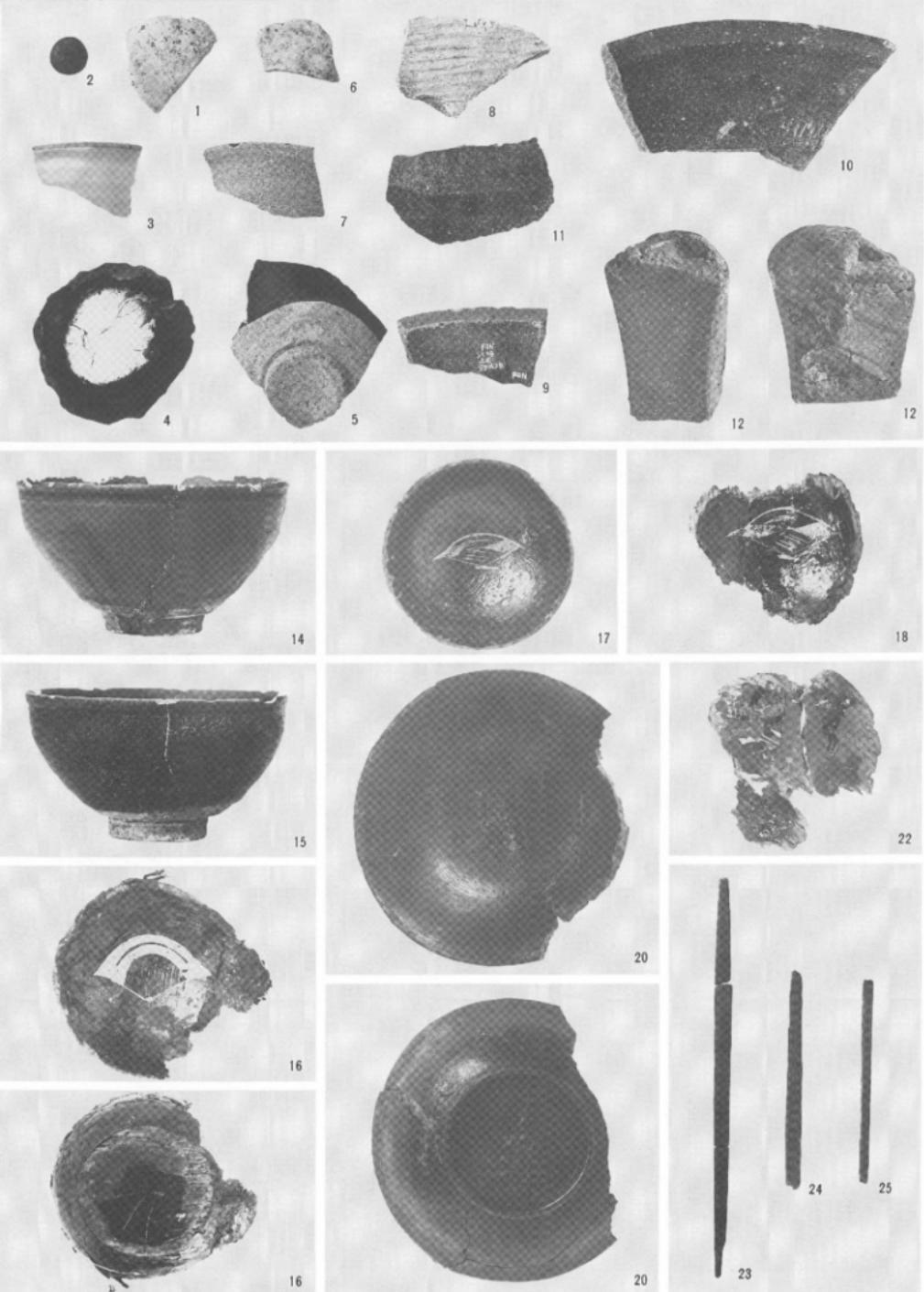


6

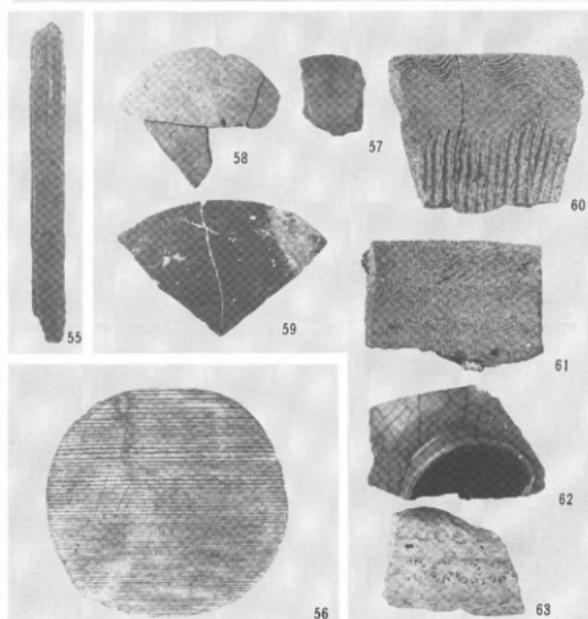
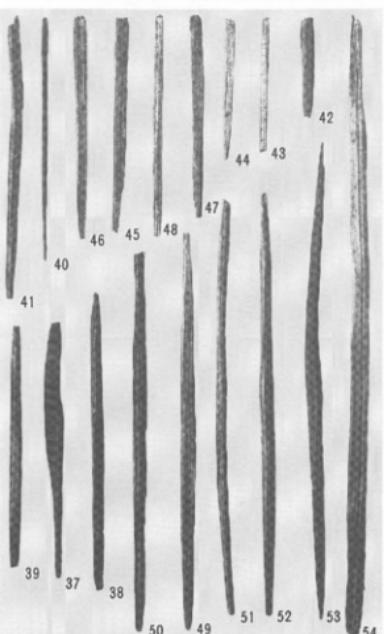
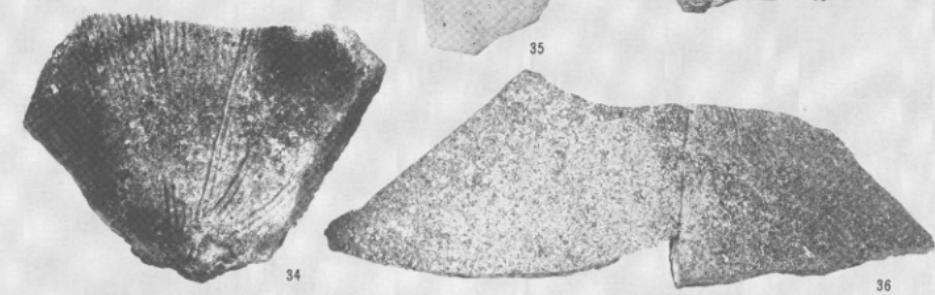
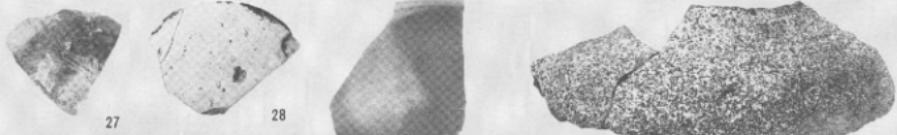


7

図版 5 1 . SK119(西から) 2 . SK11(北から) 3 . SK11(東から) 4 . SK113(南から) 5 . SK44(南から) 6 . SK103(西から)
7 . SK101(西から)



図版6 出土遺物 *番号は実測番号



図版7 出土遺物